



宇田川
一譯
物理全志
六

= 3
3913
6



二 3
3913
6



物理全志卷之六

熱學ハ熱ノ性質ト其擴布ノ法則トヲ論究スル

者ナリ熱ハ乃チ温暖ト名クル所ノ感覺及ヒ其

感覺ヲ生スル所ノ原因ヲ云ヒ冷ハ之ニ對シテ

其感覺ノ寡少ナル者ヲ云フナリ

熱ノ性質及ヒ其功用

熱ノ性質及ヒ其功用

物理全志 卷之六

宇田川準一 譯
市川盛三郎 閱

<2019-30>

熱ノ性質ヲ解説スルニ二説アリ曰ク發射説曰ク波及説是ナリ第一説ニ從テ之ヲ論センニ熱ハ更ニ重量ナキ浮氣體ニシテ速ニ此物ヨリ彼物ニ傳通ヲ為シ其分子ハ互ニ相反撥スレバ他體ノ分子ノ為ニ吸引セラレ、者ナリ此浮氣體ヲ含ムコト多キ者ハ則チ熱度高ク其少ナキ者ハ則チ熱度低シトス又第二説ニ從テ之ヲ論センニ熱ハ物體分子ノ振動ニ原因スル者ニシテ其振動ハ「イ」セルト稱スル彈力アル浮氣體ノ媒介ニ由テ一物ヨリ他物ニ傳フルコト猶空氣ノ響

媒ヲ為スカ如シ分子振動ノ強盛ナルモノハ則チ暖熱ニシテ其微弱ナルモノハ則チ寒冷ナリ蓋シ波及説ハ現今理學者流ノ一般ニ採用スル所ニシテ熱ノ發現ヲ解キ且ツ熱ト光トノ相近似セル事理ヲ證スルニ適切ス然レバ熱ノ一般ノ功用ヲ論スルニ至テハ二説ノ中孰ヲ以テ解説スルモ更ニ差異アルコトナシ凡ソ熱ハ諸物中ニ侵入シ善ク諸物ノ分子ヲシテ反撥力ヲ發起シ固有ノ凝集力ヲ破毀セシムル者ナリ故ニ熱ノ顯赫ナル功用ハ物體ヲ膨脹

セシムルト其状態ヲ變化セシムルトヲ以テ最
トス試ニ熱ヲ固體ニ加フルキハ其分子反撥力
ヲ起シテ漸ク膨脹ス尚之ヲ増加スルキハ遂ニ
液體ニ變シ次ニ氣體ニ化ス又此氣體ノ熱ヲ漸
次ニ減少スルキハ先ツ液體ニ復シ次ニ固體ニ
復ス尚之ヲ減少スルキハ次第ニ收縮ス是ヲ以
テ熱ハ諸體ヲ膨脹セシメ冷ハ諸體ヲ收縮セシ
ムルモノトス今此篇ニ於テハ先ツ熱度ノ高低
ヲ驗量スル器械ヲ説キ後ニ諸體膨脹ノ事理ヲ
論スヘシ

驗温器

熱ノ物體ニ作用ヲ為スニ二様アリ(第一)物體ノ
熱度ヲ増加セシム之ヲ顯熱ト云フ(第二)物體ノ
熱度ヲ増加スルコト無ク唯其形態ヲ變化セシム
之ヲ潛熱ト云フ例ハ氷ノ融解スル時ハ多量
ノ熱度ヲ吸収スレトモ之ノ力為メニ唯形態ノ變化
ヲ起スノミニシテ更ニ熱度ノ上昇スルヲ見サ
ルカ如シ故ニ物體ノ熱度トハ其物ノ所有スル
顯熱ノ分量ヲ云フナリ
驗温器ハ熱度ノ高低ヲ計ル者ニシテ諸體熱ニ

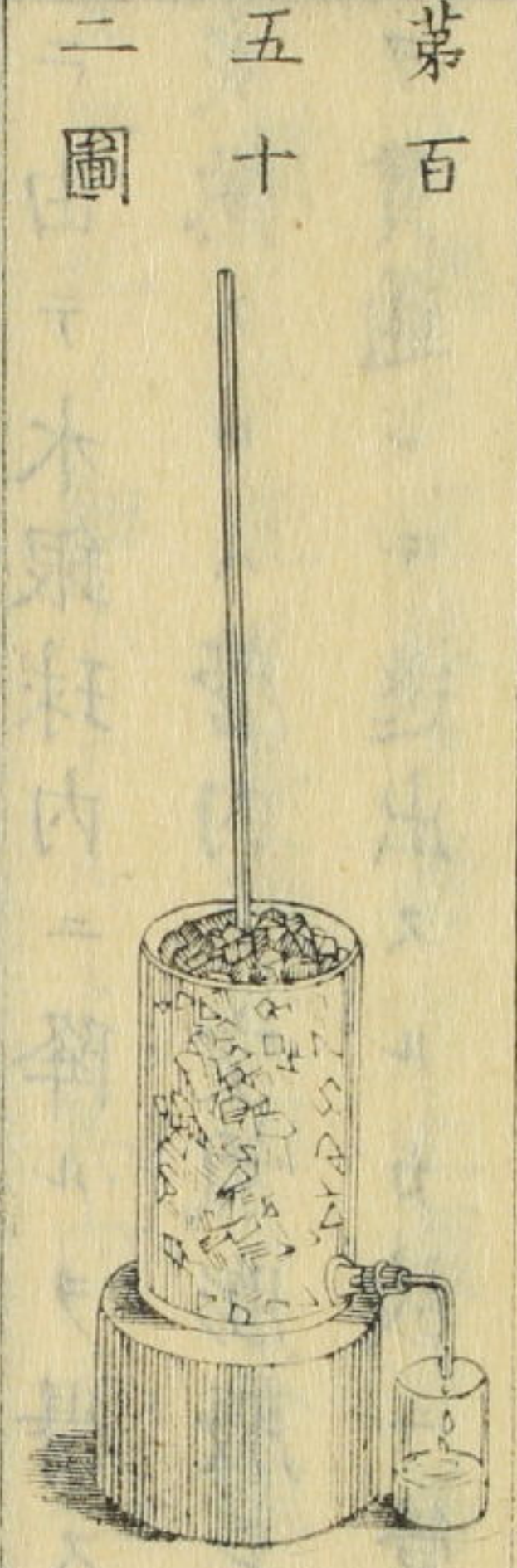
遇へハ膨脹シ冷ニ遇へハ収縮スルノ理ニ原キ
 テ製造シタル者ナリ其器中ニ盛ル所ノ液體ニ
 數種アリ或ハ水銀ヲ用井ル者アリ或ハ火酒ヲ
 用井ル者アリ蓋シ水銀ハ熱ニ由テ膨脹スル
 規正ナレト火酒ハ其膨脹規正ナラサルカ故ニ
 通常水銀製ノ者ヲ使用スルナリ
 水銀製驗温器ヲ造ルニハ第百五十一圖(ア)ノ如
 ク下端ニ空球ヲ附シ上頭ハ漏斗狀ノ玻璃細管
 ヲ製シテ先ツ其漏斗内ニ水銀ヲ盛ルヘシ然レ
 氏管孔ノ細小ナルト其内ニ在ル空氣ノ抵抗ト

ニ由テ水銀球内ニ降ルヲ得ス是ニ於テ下球ヲ
 炙熱スレハ管内ノ空氣膨脹シ其一部分ハ水銀
 ヲ貫通シテ逃出スルカ故ニ管ヲ放冷スレハ則
 チ球内ニ殘リシ稀薄氣漸ク収縮シテ少許ノ水
 銀其内ニ滴入ス次ニ復タ球ヲ炙熱シテ水銀ヲ
 第百
 五十一
 一圖
 後之ヲ冷セハ其蒸氣凝結シテ漏斗中ノ水銀ハ
 外氣ノ壓托ノ為メニ管中ニ降り全ク之ニ滿ル

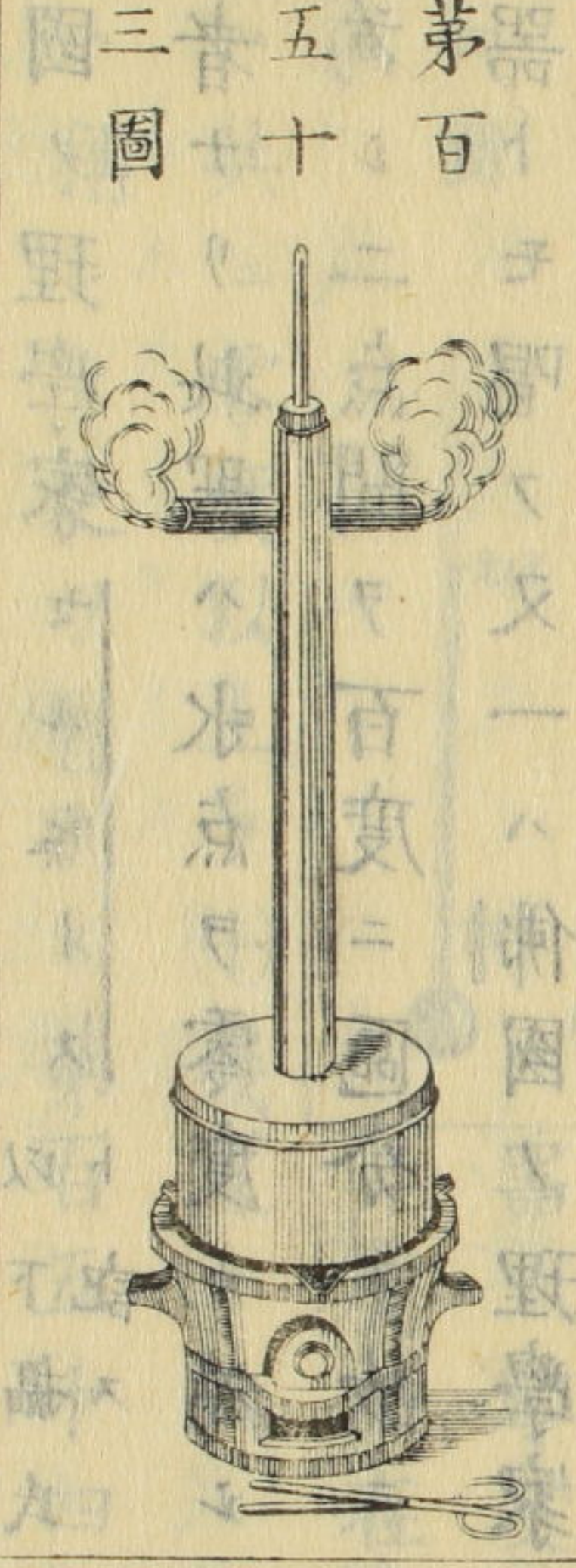


ニ至ル是ニ於テ預メ計ラント欲スル最高ノ度ニ熱シ吹管ノ火炎ヲ以テ漏斗ヲ溶去シ其管口ヲ密封シテ放冷スルキハ第百五十一圖(イ)ノ如ク水銀降テ其上部ニ真空ヲ生ス此器ニ劃度スルニハ先ツ二個ノ要点ヲ定メヤ

ルヘカラス即チ一ハ氷凍点ニシテ一ハ沸騰点ナリ氷凍点ヲ定ムルニハ第百五十二圖ノ如ク第百五十一圖ノ如ク中ニ管ヲ挿入シテ之ヲ放冷スル



キ其水銀遂至全ク降ラサルニ至ル是ニ於テ管側ニ点ヲ標シ之ヲ氷凍点トス又沸騰点ヲ定ムルニハ第百五十三圖ノ如キ装置ヲ用井テ管

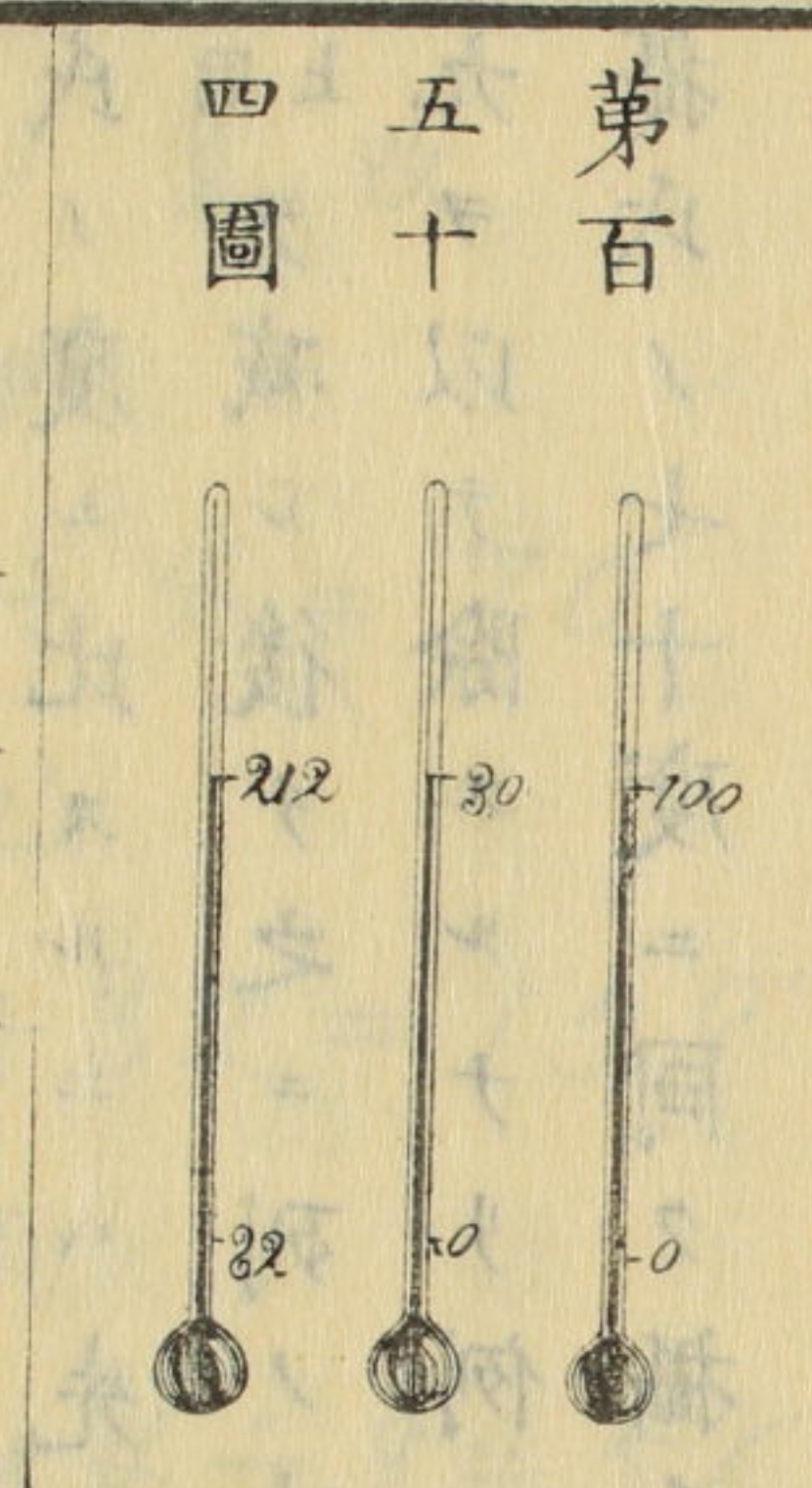


ヲ沸湯ノ蒸氣ニ觸レシメ之ヲ熱スル其水久キ其ハ其水

銀遂ニ全ク昇ラサルニ至ル是ニ於テ点ヲ標シ之ヲ沸騰点トシ此ニ点間ニ一様ナル度目ヲ畫ス又其上下蓋劃度スルモ妨ナシ蓋シ其度ヲ

劃スルニ或ハ直ニ管側ニ彫刻スル者アリ或ハ
 金屬板ニ劃シテ之ヲ木匡ニ附スル者アリ或ハ
 當時世上ニ主用スル驗温器三種アリ一ハ瑞典
 國ノ理學家セルシウス以下攝氏ト記ス又創造ニ係ル
 者ナリ此器ハ氷点ヲ零度ト為シ沸点ヲ百度ト
 為シ二点間ヲ百度ニ區分ス故ニ或ハ百度驗温
 器トモ唱フ又一ハ佛國ノ理學家レオナルド以下以
 列氏トノ創造セシ器ニレテ氷点ヲ零度トシ沸
 点ヲ八十度トシ二点間ヲ八十度ニ區分ス又一
 ハ普國ノ理學家リシレンハイト以下華氏ト記スハ創

製ニ係ル此器ハ氷点ヲ三十二度トシ沸点ヲ二
 百十二度トシ其間ヲ百



八十度ニ區分ス故ニ此
 器ノ零度ハ氷点下三十
 二度ニ在リ蓋シ此三器

ハ共ニ零度以上ヲ(+)幾度ト云ヒ以下ヲ(-)何度
 ト稱レテ之ヲ區別ス第百五十四圖ノ如シ
 此三種ノ器ハ氷沸二点間ノ度数四ト五ト九ト
 ノ如シ故ニ此比數ヲ以テ彼是互ニ其度ヲ改算
 スルヲ得ヘシ今列氏ノ其度数ハ攝氏ノ幾度ニ

相當スルヤヲ知ント欲セハ列ノ某數ニ攝ノ比
 數五ヲ乘シ列ノ比數四ヲ以テ除スヘシ又攝氏
 ノ度ヲ華氏ノ度ニ比スルニハ攝ノ某數ニ華ノ
 比數カヲ乘シ攝ノ比數五ヲ以テ除シ之ニ三十
 二華氏零點ヨリ水加フヘシ又華氏ノ度ヲ列
 氏ノ度ニ比スルニハ先ツ華ノ某數ヨリ三十二
 上ヲ減シ後チ之ニ列ノ比數四ヲ乘シ華ノ比數
 九ヲ以テ除スルナリ例ヘハ列氏ノ五十六度ハ
 攝氏ノ七十度ニ同ク攝氏ノ七十度ハ華氏ノ百
 五十八度ニ同ク華氏ノ百五十八度ハ列氏ノ五

改算ノ法式

(甲) $56^{\circ} \times 5 \div 4 = 70^{\circ}$

(乙) $(70^{\circ} \times 9 \div 5) + 32 = 158^{\circ}$

(丙) $(158^{\circ} - 32) \times 4 \div 9 = 56^{\circ}$

十六度ニ當ルノ尚
 次ニ掲クル(甲)(乙)(丙)
 ノ三式ヲ參觀シテ
 詳ニ了解スヘシ
 火酒製驗温器ハ其
 製作畧前器ト相同
 シク唯水銀ニ代ル
 ニ紅色火酒ヲ用井
 ルノ別アルノミ蓋
 シ之ヲ盛ルハ水銀

ヨリ容易ニシテ管ノ上端ニ漏斗ヲ附スルヲ要
セス其之ヲ行ハントスルヤ先ツ火ヲ以テ下球
ヲ炙熱シテ其内ニ含メル空氣ノ一部分ヲ驅除
シ然ル後管口ヲ火酒中ニ倒浸スレハ球内ノ氣
放冷スルニ從ヒ火酒ハ外氣ノ壓力ニ由テ管口
ヨリ球内ニ上昇ス是ニ於テ管ヲ火酒中ヨリ出
シ再ヒ下球ヲ炙熱スレハ則チ火酒ハ沸騰蒸發
シテ残余ノ空氣ヲ驅逐スルカ故ニ復タ管口ヲ
火酒中ニ浸シテ放冷スル片ハ其液全ク球内ニ
滿ルニ至ル而シテ此器ニ劃度スルニ其氷凍点

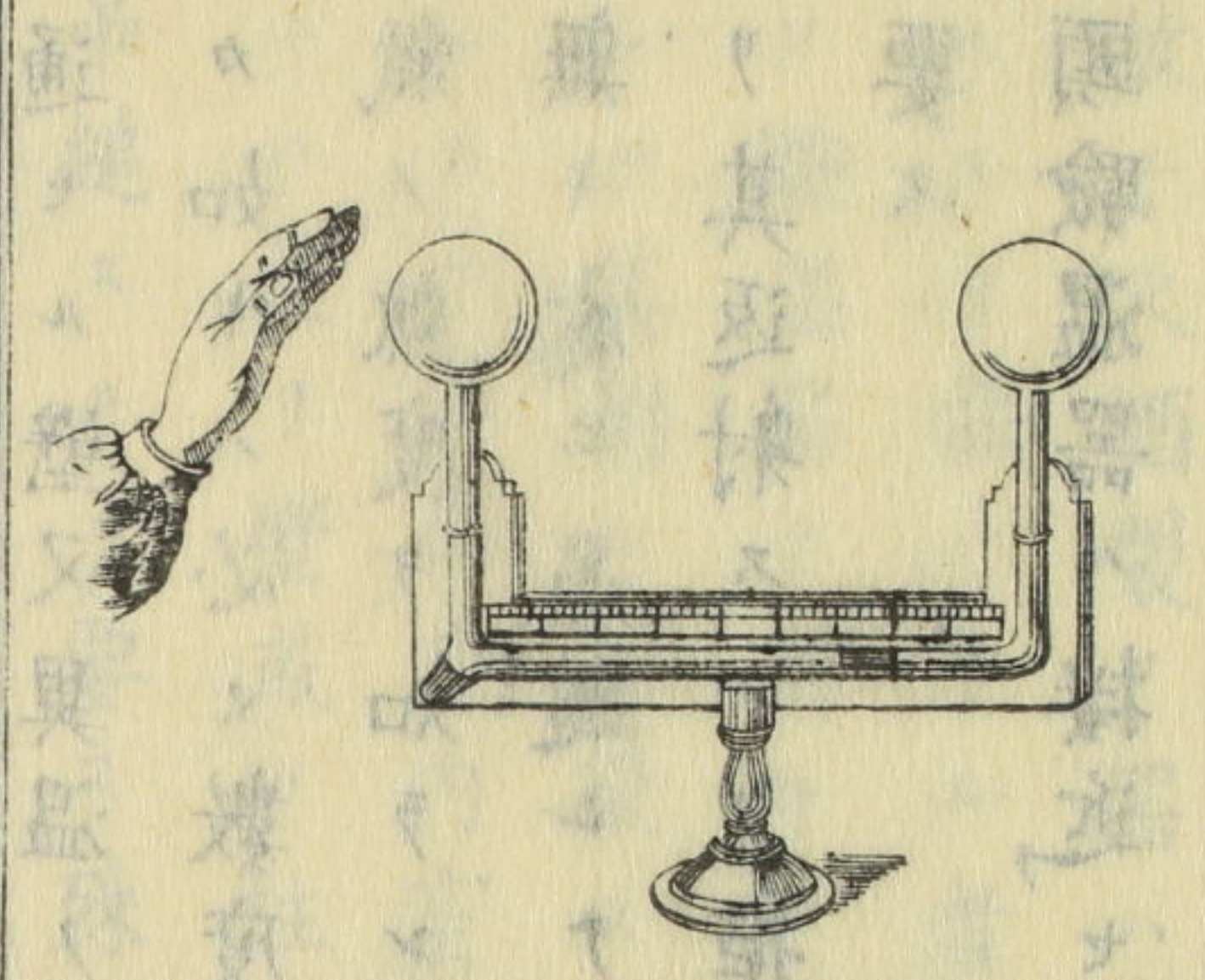
ハ前器ト同法ニ由テ定ムヘシト雖凡其他ハ前
器ニ比較シテ度目ヲ標セサルヲ得ス是レ火酒
ハ其沸騰点水ヨリ低ク且ツ其熱度ニ從ヒ膨脹
スルヲ規正ナラサルニ由テナリ
既ニ論スル如ク熱度ヲ計量スルニハ通常水銀
製ノ器ヲ用井レ凡水銀ハ華氏ノ零度以下三十
九度ニ至レハ氷凍スルヲ以テ之ヨリ以下ノ度
ヲ計ルニハ火酒製ノ器ヲ用井ルヲ得ス蓋シ
極地嚴寒ノ處ニ到レハ屢水銀ノ氷凍スルヲ
リト雖凡火酒ノ凝固スルヲハ地球上ニ於テ未

タ嘗テ之アラサレハナリ又之ニ反シテ水銀ハ
 華氏ノ六百六十二度ニ達セサレハ沸騰スル
 ナント雖氏火酒ハ百七十四度ニ於テ既ニ沸騰
 ス故ニ火酒製ノ器ハ百七十四度以上ノ熱度ヲ
 驗スルヲ能ハサル者ナリ
 凡ソ驗温器ヲ用井テ熱度ヲ計ント欲スレハ之
 ヲシテ其測ント欲スル所ノ物體ニ久シク觸接
 セシムヘシ今室内空氣ノ熱度ヲ測ラント欲ス
 ルニハ之ヲ壁或ハ柱等ニ掛ケスシテ室ノ中央
 ニ吊絶スルヲ要ス殊ニ外面ノ壁或ハ火爐管ノ

貫通セル壁又異温ノ室ニ隣接セル壁等ニ掛ク
 ルカ如キハ必ズ數度ノ差異ヲ生スルニ至ル又
 外氣ノ熱度ヲ知ラント欲スレハ之ヲ家屋樹木
 等無キ處ニ吊絶シテ太陽光線ヲ直射及ヒ他物
 ヨリ其返射スルヲ拒ミ兼テ空氣ノ流通ヲ防ク
 ヲ要ス
 雙頭驗温器ハ接近セル二處ノ熱度ノ差ヲ計ル
 器ニシテ其主用スル所ノ者二種アリ一ヲ米國
 ノ理學家ラムホルドノ器トシ一ヲ英國人レス
 リイノ器トス

ラムホルドノ器ハ第百五十五圖ノ如ク四字狀ニ屈曲シタル玻璃細管ノ兩端ニ二個ノ空球ヲ附シ管ノ中央ニ一滴ノ火酒ヲ入レテ兩端ノ空

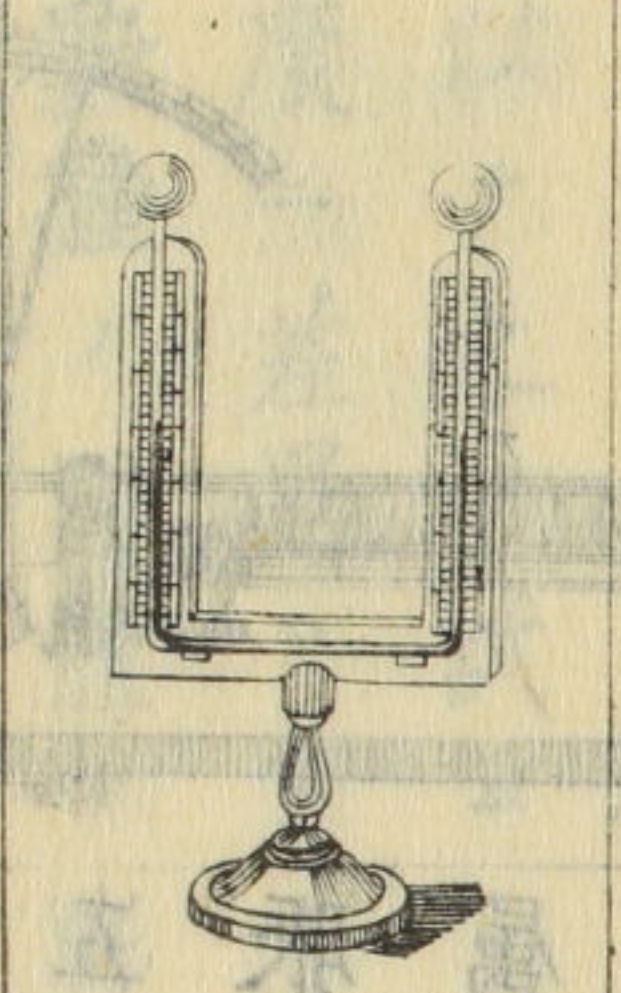
第百五十五圖



氣ヲ隔絶セシメ而シテ之ヲ適宜ノ木匡ニ架シ其上ニ附スルニ中間ヲ零度トシテ左右ニ刺目シタル尺度ヲ以テス今手掌ヲ一端ノ球ニ近クルカ如キ此少ノ熱度ト雖モ球内ノ空氣

膨脹シテ火酒ヲ他端ニ壓托シ兩球内ニ在ル空氣ノ張力相平均スルニ至テ止ム蓋シ此器ヲ劃度スルニハ水銀製ノ器ヲ以テ標準ト為スモノ

第百五十六圖

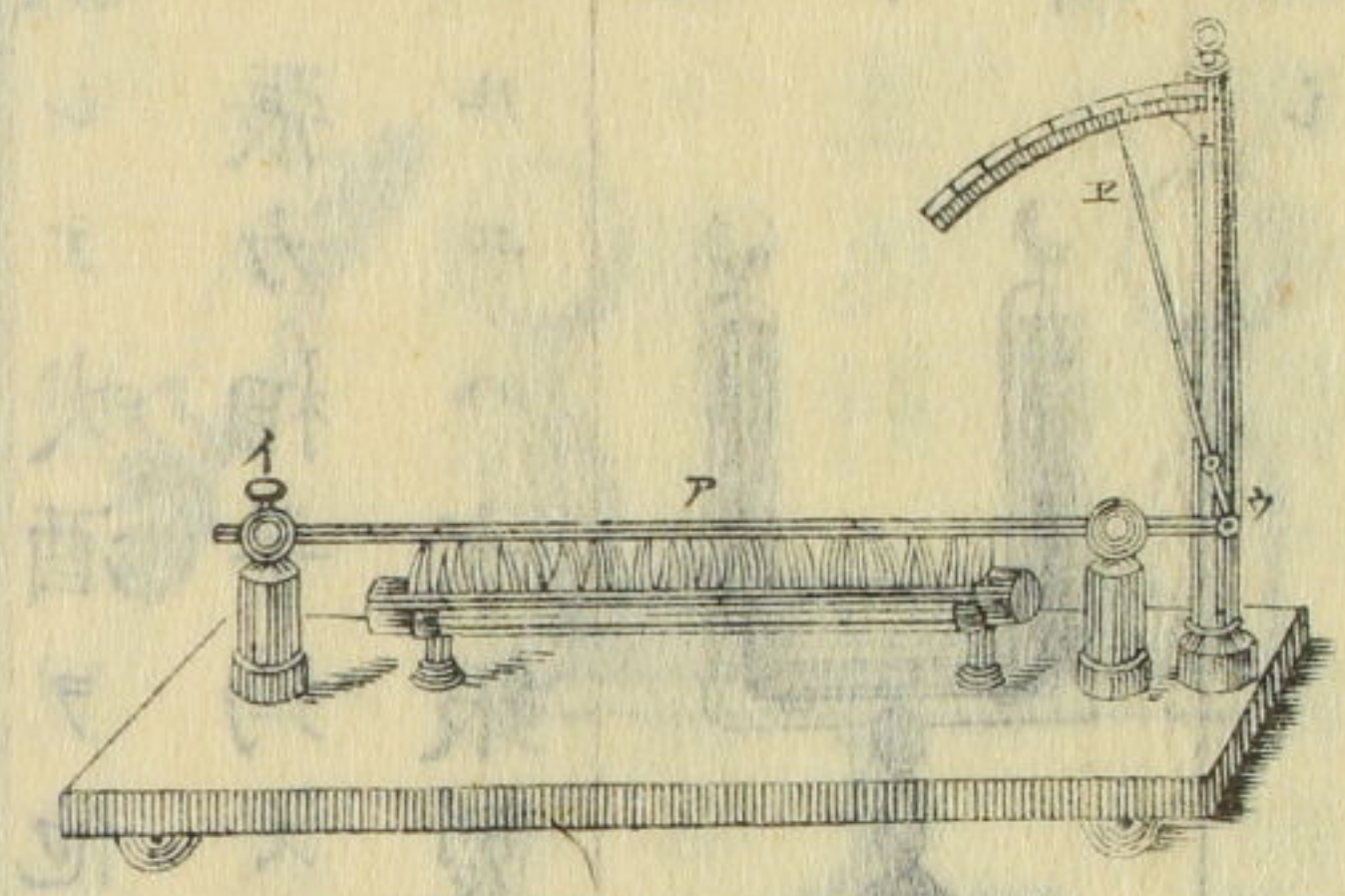


ナリハ此器ハ形狀前器ト異リイノ器ハ形同ト畧相同シ第百五十六圖ノ如シ

固體三體膨脹ニハ膨脹スルニ其膨脹ノ度ニ至テハ甚ク差異アリ就中膨脹スルノ最モ多キモ

ハ浮氣體ニシテ次ハ融液體次ハ固形體ナリ
液體ニ在テハ唯其積ノ膨脹スルヲ以テ
固體ニ在テハ之ヲ二種ニ區別ス即チ長サノ膨

第五百五十七圖



脹及ヒ積ノ膨脹是ナリ第百
五十七圖ハ金屬百長サノ膨
脹ヲ驗量スル器ナリ(ア)ハ金
屬ノ棍ニシテ左右ノ二柱ヲ
貫穿シ其一端ハ(イ)ノ螺旋ヲ
緊施シテ動カサラシメ他端
ハ自在ニ延長スルヲ得ヘカ

ラシム今火ヲ以テ(ア)棍ヲ熱スルハ其長サ膨
脹シテ(ウ)ノ處ヲ推スカ故ニ(エ)ノ針ハ從テ動キ
以テ上邊ノ度目ヲ指示ス此ノ如ク各種ノ金屬
棍ヲ以テ之ヲ試ムレハ(エ)針傾斜ノ度ニ由テ膨
脹ノ度ニ差異アルヲ知ルベシ
左ニ數種ノ固體ノ膨脹表ヲ掲ク但シ氷点ノ時
ノ長サヲ本位ト為シ之ヲ熱シテ沸点ニ至ルマ
テニ膨脹スル所ノ度ヲ示スモノナリ
華氏三十二度即チ氷点ノ時ノ長サヲ以テ五
一零々々々々々々々々々々々

トスレハ二百十二度即チノ時ノ長サ左ノ如シ

玻璃 二九〇

白金 一零々々八七

鑄鐵 一零々々一零九

鍛鐵 一零々々一二零

黄金 一零々々一四四

銅 一零々々一七一

黄銅 一零々々一八八

銀 一零々々一九二

錫 一零々々一九六

(N) 鉛 一零々々二八二

亞鉛 一零々々二九八

又第百五十八圖ハ積ノ膨脹ヲ驗證スル器ニシ

テ(ア)ハ金属球(イ)ハ球ノ自在ニ

通過スヘキ大サノ圈輪ニ此

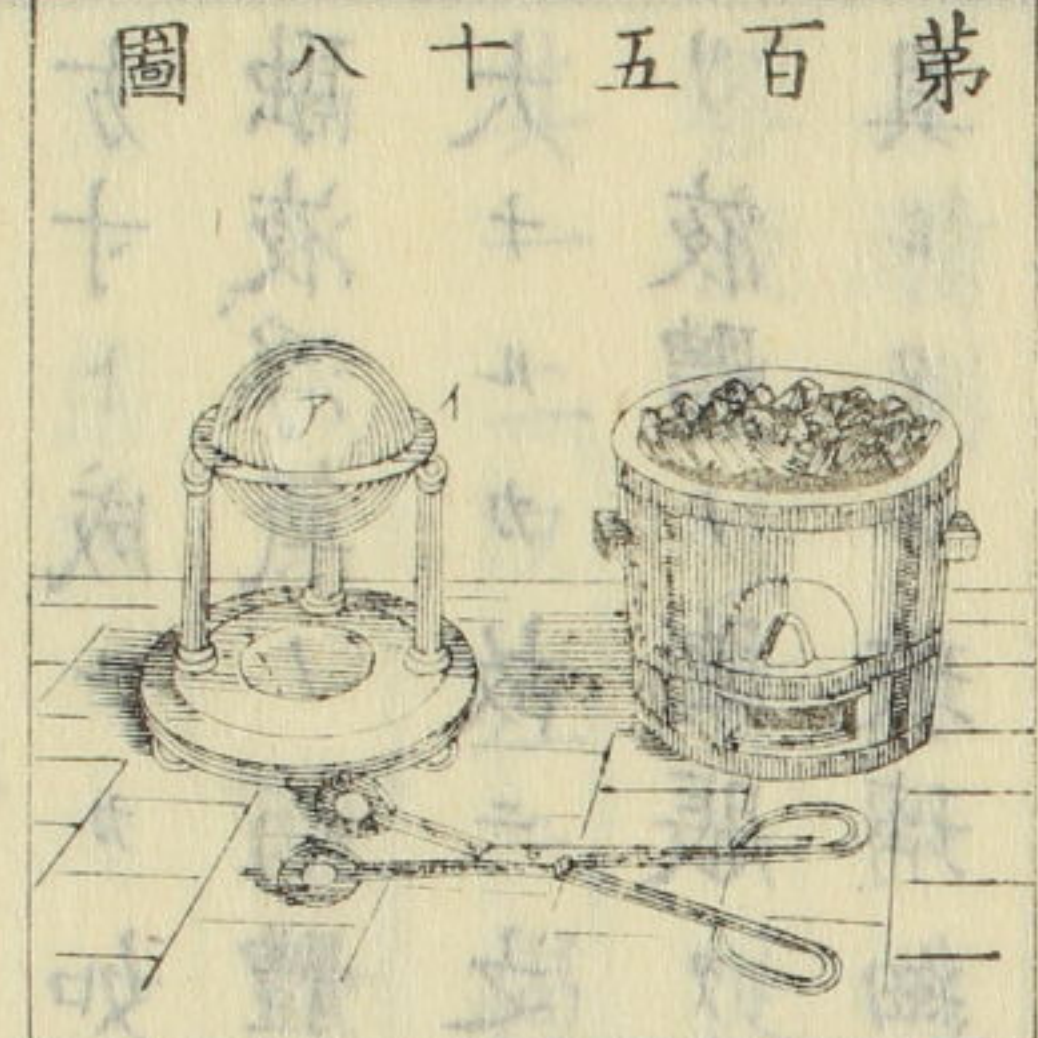
球ヲ熱シテ圖ヲ如ク輪上ニ安

置スル片ハ其球膨脹セシテ以

テ通過セサレバ暫時放冷スル

片ハ収縮シテ圈ヲ過キ落下スルニ至ル蓋テ諸

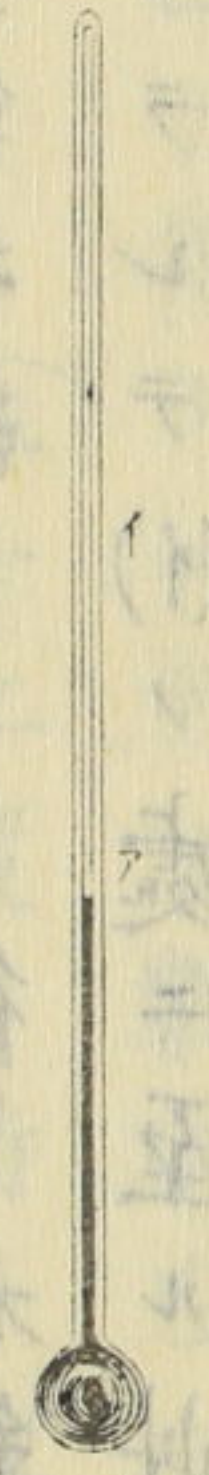
體ノ積ノ膨脹ハ其長サノ膨脹ニ三倍スルモリ



ナリ例ハ氷点ノ時鍛鐵ノ積十立方寸アリ
 トスルキハ沸点ニ及テ其積十萬ト三百六十立
 方寸ト成ルカ如シ
 融液浮氣ノ兩體ハ固體ニ比スルハ膨脹スル
 大ナルカ故ニ之ヲ試験スルコトモ亦從テ容易ナ
 リ液體ノ膨脹ヲ試ムルニハ先ツ一端ニ空球ヲ
 具シタル玻璃細管ヲ取り第百五十九圖ノ如ク
 其球ト管ノ一部トニ水或ハ水銀ノ如キ液ヲ盛
 リ而シテ球ヲ熱スルキハ其液膨脹シテ(ア)ヨリ
 (イ)ニ上昇シ尚之ヲ熱スルキハ遂ニ管頭ニ上昇

スヘシ然レモ之ヲ放冷スレバ其液収縮シテ故
 第百

五十
 九圖
 位ニ復ス此ノ如クシテ膨脹ノ度



ヲ精測シタルニ液體ハ固體ヨリ其度多ク且ツ
 各液ノ性質ニ從テ多少ノ差アルヲ知レリ乃チ
 其一二ヲ左ニ掲ク

(三十二度ノ時ノ容積)

水
 二百十二度ノ時ノ容積
 一零四二零二

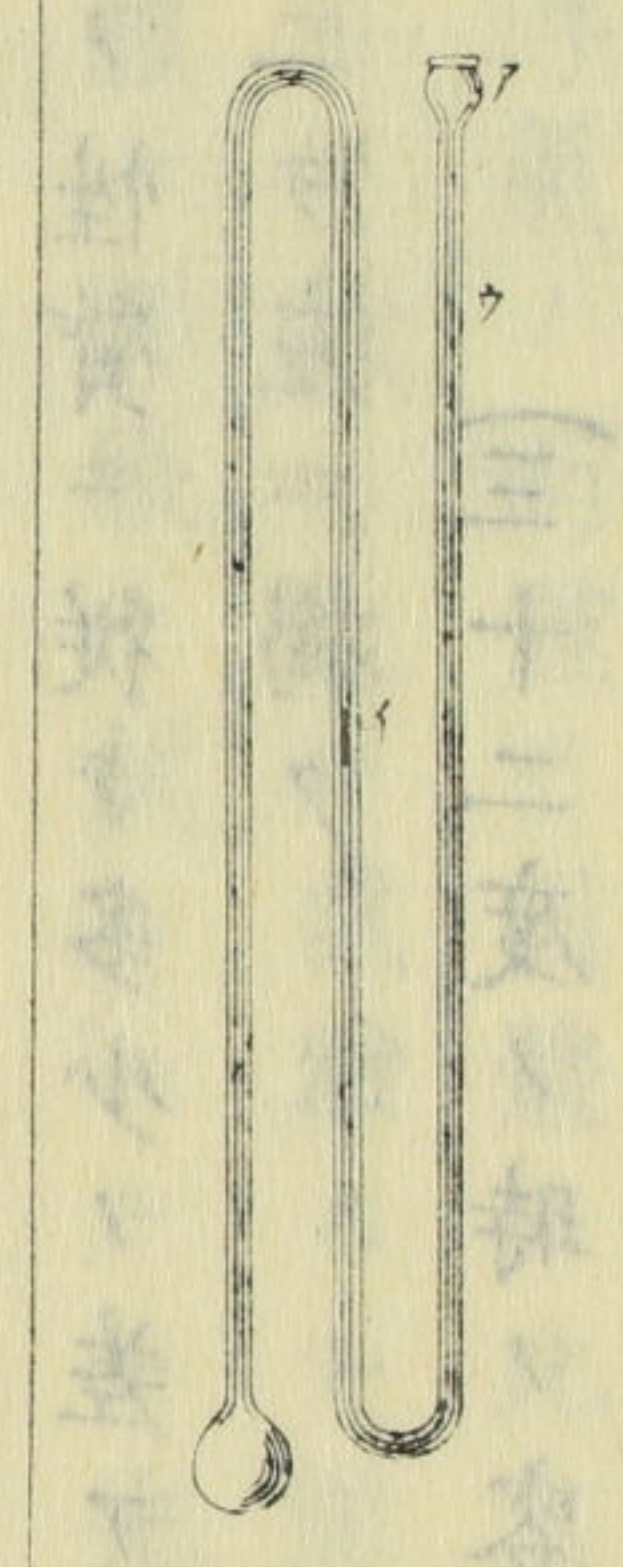
水銀

一零一八一五

氣體ノ膨脹ヲ試ムルニハ第百六十圖ノ如クニ
重ニ屈曲シテ一端ニ空球ヲ具セタル玻璃細管

第百六十

圖



ヲ取り先ツ其球
ヲ熱シテ内氣ノ
一部令ヲ驅除シ

水銀ノ一滴ヲ(A)ノ處ニ注入シテ放冷スレハ球
内ノ空氣収縮スルニ從ヒ水銀ハ外氣ノ為メニ
壓托セラレテ(B)ノ處ニ至ル此時ニ當リ手ヲ以
テ下球ヲ握ルルハ球内ノ空氣熱ヲ受ケ膨脹シ

テ水銀ヲ(C)ノ處ニ壓却スヘシ令又精密ナル試

驗ニ由テ得タル所ノ數ヲ左ニ掲ク

(三十二度ノ時ノ容積)

一三六六五零

(二百十二度ノ時ノ容積)

一三六六八二

一三六六七八

一三六六七八

炭素ノ異同ニ備テ一三六八九六

前表ニ由テ之ヲ見ルニ氣體ハ液體ヨリ膨脹ノ

度更ニ甚シク且ツ固液二體ト異ナリテ各種ノ
 氣體其性質ノ異同ニ論ナク膨脹ノ度大抵相同
 シキモノナリ
 既ニ記載セル諸種ノ試験ニ由テ之ヲ考レハ熱
 ハ諸體ヲ膨脹セシメ冷ハ諸體ヲ収縮セシムル
 一明瞭ナリト雖モ間々或ハ此規則ニ適合セサ
 ルヲアルニ似タリ然レモ其原理ヲ推究スル所
 ハ決シテ然ラス今一例ヲ舉テ之ヲ示サン紙、木、
 粘土等ノ如キ水氣ヲ吸収スヘキ諸物ハ熱ヲ與
 マレハ収縮スレモ其實ハ體中ニ含有セル水氣

熱ノ為メニ蒸騰スルニ因レリ是ヲ以テ其體中
 ノ水氣全ク消散スルニ至リ之ニ熱ヲ與ルルハ
 定則ニ從テ膨脹スルモノナリ
 物體脹縮ノ理ハ屢々實際ニ使用スルヲアリ例
 ヘハ車輪ニ鐵環ヲ施シ或ハ傾歎セシ障壁ヲ脩
 復スル時ノ如キ是ナリ 第一卷膨脹性ノ條
 融解
 前ニ論セシ如ク熱ハ唯物體ヲシテ膨脹セシム
 ルノミナラス能ク其形狀ヲ變化セシムル者ナ
 リ即チ固形體ヲシテ融液體ニ變シ融液體ヲシ

テ浮氣體ニ化セシム然ルニ其熱ヲ減却スルキ
 ハ必ス漸ヲ以テ故態ニ復ス而シテ固形體ノ融
 液體ニ變スルヲ融解ト云ヒ融液體ノ固形體ニ
 復スルヲ凝固ト云フ但シ其融解シタル者ヲ放
 冷シテ最初ニ融解ヲ催シタルキト同度ニ至レ
 ハ再ヒ凝固スルヲ見ル故ニ融解ノ度ハ凝固ノ
 度ト正ニ相同シキモノトス
 凡ソ物體ノ融解ハ其分子ヲ固著セシムル凝聚
 カト之ヲ反撥セシムル熱カト相平均スルニ當
 テ生スル者ナリ而シテ融解ニ要用ナル熱度ノ

高低ハ物ニ從テ各同シカラズ乃チ最要ナル諸
 物ノ融解度ヲ左ニ表示ス
 華氏零下三十九度
 水銀
 獸脂 九十一度
 白蠟 百四十九度
 硫黃 二百三十二度
 錫 四百五十五度
 蒼鉛 五百度
 鉛 六百二十七度
 アンチモニ 八百四十二度

物理全志 卷之六

亞鉛 九百三十二度

銀 千八百三十二度

黃金 二千二百八十二度

物體ハ悉皆熱ノ為メニ融解スル者ニアラス紙木角及ヒ大理石等ノ如キハ之ニ高熱ヲ與フレハ融解セスレテ分解スル者ナリ但シ一元素ヨリ成ル所ノ者ハ炭素ヲ除クノ外悉ク融解セサルハナシ
物體ヨ熱レテ融解度ニ達シタル後ハ假令火力ヲ増熾スルトモ其物全ク融解シ了ルニ非レハ

更ニ熱度ヲ高ムルヲ得ス例ヘハ氷ヲ熱スルカ如キ其熱三十二度ニ達スレハ始テ融解ヲ催ス爾後火力ヲ猛烈ニスルキハ其融解ヲ促進スレハ氷塊ノ全ク融解シ盡クルニ至ラサレハ更ニ熱度ノ増加スルヲ見ス加之其融解シテ生スル所ノ水モ亦三十二度ニシテ其熱度毫モ最初ノ氷ト異ナルヲナシ是ニ由テ之ヲ考フルニ物ノ融解スル際ニ費ユル所ノ熱量ハ全ク體中ニ竄入シテ其熱度ヲ變化セサラシムル者ナリ故ニ之ヲ液體潛熱ト云フ

物理全志 卷之六 十七

潜熱ヲ試ムルノ法ハ先ツ華氏三十二度ノ氷塊
 一斤ヲ取り百七十四度ノ水一斤ト混スレハ其
 熱量正ニ氷塊ヲ融解スルニ適スルヲ以テ三十
 二度ノ水二斤ヲ得ヘシ此ノ如ク一斤ノ氷ヲ融
 解スルニハ之ト同量ノ水ヲ零度ヨリ百四十二
 度ニ達セシム可キ熱量ヲ要スルナリ故ニ水ヲ
 一度熱スルノ熱量ヲ以テ一位トスルキハ三十
 二度ノ水中ニ潜匿スル熱量ハ百四十二位タル
 事ヲ知ルナリ

前理ノ如ク氷ノ融解スルキハ許多人ノ熱量其中

ニ潜匿スルヲ以テ外氣ノ熱度三十二度ニ過ク
 ルト雖モ氷塊俄カニ融解スルナク又之ニ反
 シテ氷ヲ結フキハ最初ニ潜匿シタル熱ヲ水中
 ヨリ發出スルカ故ニ嚴寒ノ候ト雖モ亦遷ニ凝
 結スルナリ此ノ如ク氷ノ融解スルキハ能ク
 熱ヲ吸収シ水ノ凝結スルキハ能ク熱ヲ發出ス
 ルニ由リ江湖ノ濱ニ在テハ寒暑共ニ却テ他處
 ヨリモ酷烈ニ至ラサル者ナリ

凝固及ヒ結晶

熱ニ由テ融解シタル物ハ其熱ヲ除去スレハ則

再ヒ故態ニ復ス斯ク液體ヨリ固體ニ變スル
ヲ凝固ト云フ而シテ其凝固スルキノ熱度ト融
解スルキノ熱度トハ各同一ナラサルハナシ故
ニ水ヲ冷シテ三十二度ニ至レハ凝結シテ氷ト
成リ氷ヲ熱シテ三十二度ニ至レハ融解シテ水
ト成ル且ツ其凝固スルキ放出スル所ノ熱量ハ
融解スルキ吸収スル所ノ熱量ト全ク同一ナリ
融液體ノ凝固スル熱度ハ各物皆同一ナラス今
其一二ヲ舉クルニ純水ノ如キハ三十二度ヲ以
テ氷結シ海水ハ二十七度橄欖油ハ二十一度胡

桃油ハ十七度ヲ以テス然レモ火酒及ヒイセ
ル揮發ノ如キニ至テハ未タ人工ヲ以テ氷結セ
シムルヲ能ハサル者ナリ
水ヲ冷セハ則チ漸ク収縮シテ華氏三十九度十
分二ノ時ニ至テ其質緻密ノ極度ニ達スルモノ
アリ之ヨリ以下漸ク其容ヲ増シ三十二度ニ至
レハ更ニ膨脹シテ氷凍結合ス其凍合スルキハ
膨脹力甚タ強烈ニシテ往々器物ヲ破損スル
ナリ故ニ寒夜器皿等ニ水ヲ貯スルキハ宜シク
之ニ注意スヘシ斯ク水ノ凍合スルヤ反テ其容

ヲ増加スルニ由リ之ヲ未タ凍合セサル水ニ比
スルニ其質疎鬆ニシテ比重ノ減少スルモノト
ス彼氷塊ノ水面ニ浮ンテ沈没セサルハ全ク此
理ナリ
固形體ノ融液體ニ變化スルヤ必ス熱ヲ吸収ス
ルカ故ニ其力ヲ藉リテ甚シキ寒冷ヲ生セシム
ルヲ得ヘシ其法食塩一分ト氷屑二分トヲ交
加スルニ在リ此ノ如クスレハ二物互ニ相親和
シテ液體ニ變シ其際自己ノ顯熱ヲ吸収スルヲ
以テ其熱度甚シク低下シ非常ノ寒冷ヲ生スル

ニ至ル蓋シ此混和物ヲ用井ル井ハ華氏零度ノ
寒冷ヲ得ヘキナリ
融液體ヲ徐々ニ放冷シテ固形體ニ變セシムル
片ハ其分子凝結シテ整正美麗ノ形象ヲ呈ス之
ヲ名ツケテ結晶ト云フ食塩砂糖明礬及ヒ雪等
ノ如キ是ナリ
物體ヲ結晶セシムルニ二法アリ(其一)結晶セシ
メント欲スル物ヲ溶解シテ徐々ニ放冷スヘシ
例ヘハ硫黃ノ如キ之ヲ器中ニ溶解シテ徐々ニ
放冷スル片ハ先ツ其器ニ觸接シタル處始テ結

晶ヲ生スルヲ見ルヘシ此時ニ當リ上面ノ膜ヲ
破開シテ内液ヲ傾ケ去ルキハ美麗ナル結晶ヲ
得ルナリ

(其二) 結晶セシメシト欲スル物ヲ溶解シテ其液
ヲ徐々ニ蒸散スベシ此ノ如クスレハ水分ノ蒸
發スルニ從ヒ器底下側面トニ結晶ノ生成スル
ヲ見ルヘシ海水ヨリ食塩ヲ製スルハ即チ此法
ニ因ル蓋シ蒸發ヲ遲緩ニスレハ從テ美麗ノ結
晶ヲ得ルナリ

蒸發附揮發液及ヒ不揮發液ノ區別

融液體ノ浮氣體ニ變シテ飛散スル之ヲ蒸發
云フ而シテ其發散スル所ノ氣體ヲ稱シテ之ヲ
蒸氣ト云フ蒸氣ハ大概無色ニシテ見ルヘカラ
サル者ナリ
融液體ハ大概其熱度ノ高低ニ關セスシテ常ニ
蒸發スル者ナリ例ヘハ河海等ノ水ノ如キ其大
氣ト觸接スル所ハ始終蒸騰シテ休期アルコト
シ故ニ大氣ノ熱度忽然低下スルキハ其中ニ含
有セル蒸氣再ヒ凝結シテ雲霧ヲ為スニ至ル蓋
シ蒸發ノ多少ハ大氣ノ熱度及ヒ風ノ強弱等ニ

由テ異同アリ其理ハ後ニ論スヘシ
融液體ノ蒸發スルハ固形體ノ融解スルハ
如ク多量ノ熱ヲ吸収シ去ルカ故ニ寒冷ヲ生ス
ルノ原ト成ル火酒ヲ肌膚ニ滴スレハ忽チ冷ヲ
覺ヘ夏日道路ニ水ヲ灌ケハ從テ涼ヲ生スルモ
ノハ二液ノ蒸發スルニ際シテ他ノ熱ヲ奪去ス
ルニ由ルナリ又乾枯セサル薪ヲ焚燒スルハ
其熱力ノ乾枯シタル者ニ及ハサルモ此理ヲ
蒸發ニ遲速ヲ生セシムル原因四アリ曰ク熱度
ノ高低曰ク壓力ノ多少曰ク風ノ強弱曰ク液面

ノ廣狹是ナリ

其一 熱度増加スルハ蒸氣ノ張力從テ増サ
ルヲ得ス張力増スルハ蒸發ノ度亦從テ速カ
ナル者ナリ例ヘハ「ト」トキスト「ト」ト動植物ヲ製
造スルハ室内ノ熱度ヲシテ八十度乃至百四十
度許ニ為シ且ツ終始空氣ヲ流通循環セシムレ
ハ蒸發ヲ速ニスルカ如キ是ナリ
其二 壓力減少スルハ蒸發ヲ促進スル者ナ
リ例ヘハ舍利別ヲ濃厚ナラシメントスルニ之
ヲ大ナル圓鍋内ニ入レ排氣筒ヲ用井テ内氣ヲ

抽出スルキハ速ニ其功ヲ奏スルヲ得ルノ類是
ナリ
其三 液面ニ觸接スル所ノ空氣流通セサルハ
ハ其氣直ニ發生スル蒸氣ノ為メニ飽和セラレ
テ他ニ蒸氣ノ發生ヲ妨害スレバ空氣始終流通
スルハ蒸發ノ度ヲ速ニスルヲ得ルナリ彼濕
潤ナル道路ノ如キ風アル時ハ風ナキ時ヨリモ
乾燥シ易ク又液類ヲ蒸發セシメントスルハ
ヲ用井テ液面ノ空氣ヲ流通セシムルモ皆同理
ナリ

其四 液面廣大ナルハ其蒸發スヘキ處多キ
ヲ以テ大ニ之ヲ促進スル者ナリ海水ヨリ食塩
ヲ製セントスルヤ之ヲ淺キ大皿ニ盛リテ日光
ニ晒スハ其水漸次ニ蒸散シテ一時ニ多量ノ
結晶ヲ得ルカ如キ以テ其理ヲ徴スヘシ
融液體ハ蒸發性ノ有無ニ由テ之ヲ揮發ト不揮
發トノ二種ニ區別ス
揮發液ハ水、火酒、イソセル等ノ如ク熱度ノ高低
ニ關セス常ニ能ク蒸發スヘキ性ヲ有スル者ヲ
云フ今若シ器内ニ水、火酒或ハ^{イソセル}ヲ盛リ

之ヲ大氣ニ曝露スル片ハ漸々蒸散シテ遂ニ一
滴ノ存セサルニ至ル其他香油及ヒ揮發油ノ類
ハ皆此種ニ屬ス薔薇油、橙油ノ如キ是ナリ又固
形體ヨリ直ニ浮氣體ニ化スル者アリ樟腦及ヒ
麝香ノ如キ是ナリ
不揮發液ハ魚油、橄欖油等ノ如ク如何ナル熱力
ヲ附與スルニ決シテ蒸發スルトナキ者ヲ云フ
凡ソ此等ノ物ハ熱ヲ與ル甚シケレハ數種ノ氣
體ニ分解シテ假令之ヲ放冷スルトモ再ヒ故態
ニ復スルトナレ又亞麻仁油ノ如ク大氣ニ曝露

スル片ハ變シテ固體ト成ル者アリ是其大氣中
ノ酸素ヲ吸収スルニ因ルナリ
真空中ニ於テ水及ヒ水銀ノ凝固
既ニ論セン如ク水ヲ排氣鐘内ニ置キテ内氣ヲ
抽出スレハ其氷結スルヲ見ル若シ水ヨリモ揮
發性ノ強キ者ヲ用井ル片ハ更ニ甚シキ寒冷ヲ
生スルヲ得ヘシ試ニ綿ヲ以テ驗温器ノ下球ヲ
包絡シ液體亞硫酸ヲ以テ之ヲ浸潤シ排氣鐘内
ニ置キテ内氣ヲ抽出スレハ亞硫酸速ニ水銀ノ
熱ヲ奪掠シテ蒸散スルニ由リ僅ニ三四分時ヲ

經レハ水銀全ク凝結スルニ至ル此時ニ當リ其
球ヲ破碎シテ之ヲ出スニ其堅硬ナル一印文ヲ
彫刻シ得ヘシ然レモ俄頃ニ他物ノ熱ヲ吸収シ
テ故態ニ復スル者ナリ

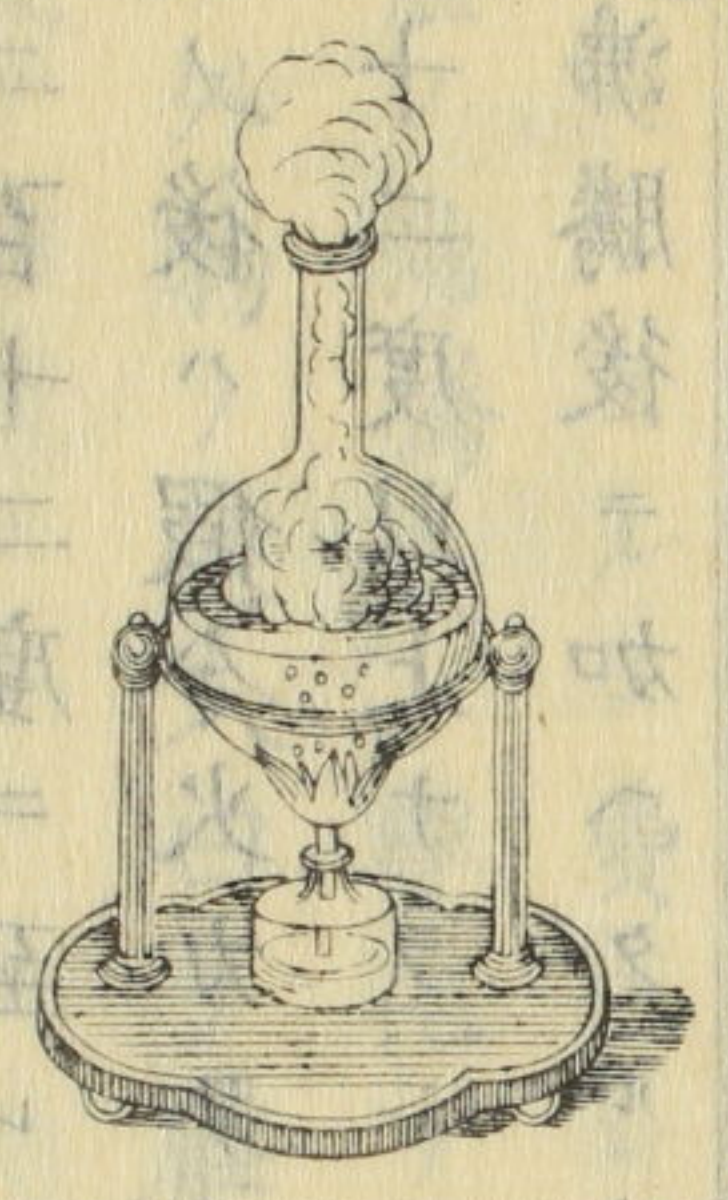
沸淬

物ノ沸淬ハ融液體ノ泡沫ニ化シテ速ニ蒸散ス
ルノ謂ニシテ其泡ハ液ノ下底ヨリ發出シ浮上
シテ遂ニ空中ニ飛散スルナリ今水ヲ熱スル
ニ就テ之ヲ言ハシニ初メ浮上スル所ノ泡ハ水
中ニ含有セル空氣ノ膨脹シテ昇騰スルニ係ル

第百

六十

一圖



尚之ヲ熱スル片ハ水
分子蒸氣ニ化シテ浮
上スレモ上層ノ寒冷
ナルニ由リ其氣収縮

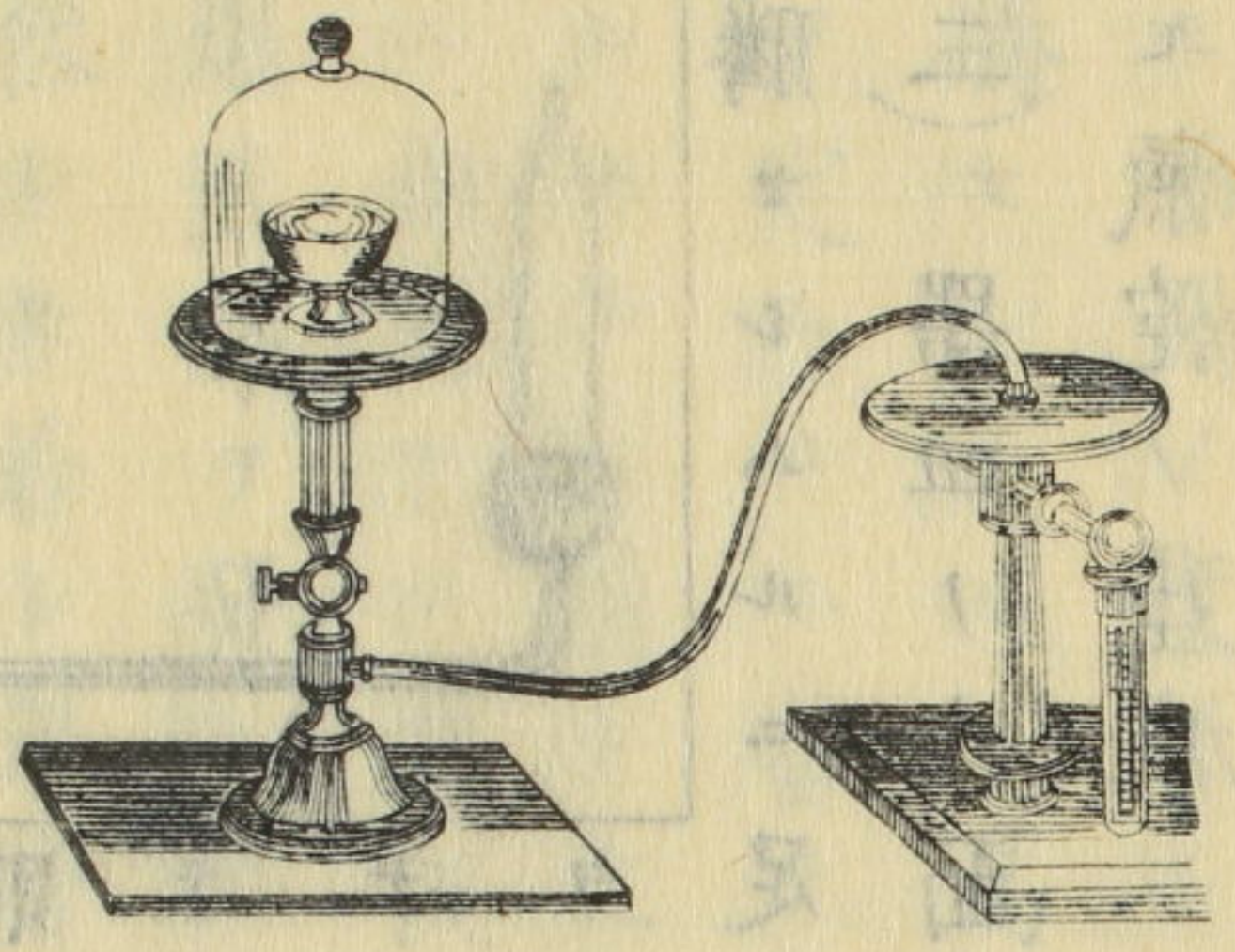
シテ再ヒ水ニ復ス更ニ火力ヲ加ヘテ全鼎ノ水
悉ク熱ヲ受クルニ至レハ氣泡ヲ収縮セシムル
者ヲキヲ以テ遂ニ滾々トシテ沸騰スルニ至ル
第百六十一圖ノ如シハ百ノ更ハ火熱ノ百ノ十
物ノ沸淬ニ關涉セルニ則アリ
其一 壓力相同シキ片ハ諸液ノ沸淬スル各

一定ノ度アリ之ヲ沸騰点ト云フ例ハ驗歴器
ノ水銀二尺五寸ノ片純水ノ沸騰点ハ華氏二百
十二度ニシテイセシハ百八度火酒ハ百七十
四度水銀ハ六百六十度タルカ如シ
其二 歴力變化セサル片ハ諸液ヲ熱シテ其沸
騰点ヨリ高度ニ至ラシムル能ハス例全蒸水ヲ
熱シテ二百十二度ニ至レハ則チ沸騰ス既チ沸
騰スルノ後ハ假令火力ヲ増加スルモ其熱ヲ
テ二百十二度以上ナラシムルヲ能ハサルカ如
シ蓋シ沸騰後ニ加ヘタル熱ハ其液ヲシテ蒸氣

ニ變化セシムルニ費ユレハナリ
融液體ノ沸騰点ニ變化ヲ起サシムル原因三
リ曰ク外物ノ溶入曰ク歴力ノ強弱曰ク器皿ノ
性質是ナリ
其一 外物ノ液中ニ溶入スル片ハ大概沸騰ノ
度高キ者ナリ故ニ塩分ヲ含有スル水ハ其沸騰
スルヲ清水ヨリモ難シ然レモ溶入スル汚ノ物
質水ヨリモ揮發シ易キ片ハ沸騰ノ度却テ低キ
ヲ見ル又濃厚粘質物ノ水中ニ混在スル片ハ沸
騰ノ度高キヲ以テ石礫水ノ沸騰シタル者ハ清

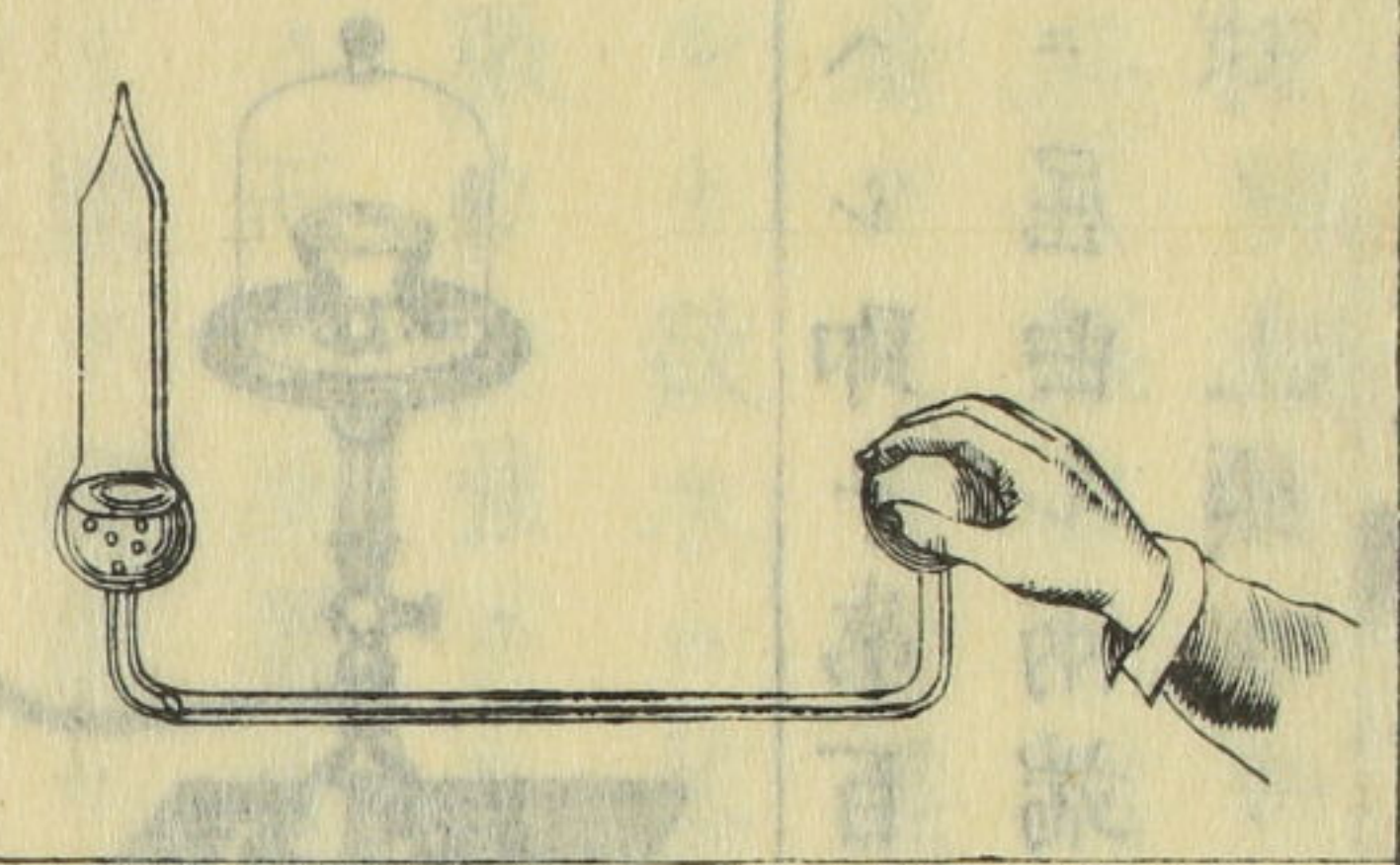
水ノ沸騰シタル者ヨリ其熱度更ニ高シトス
 其二 壓力ノ増減ハ沸騰点ニ高低ヲ生セシム
 ル者ナリ蓋シ壓力強大ナルハ液ヲ沸騰セシ
 メント欲セハ蒸氣ノ張カヲ強クセサルヘカ
 ス張カヲ強クセント欲セハ熱度ヲ高クスルヲ
 要ス而シテ壓力弱小ナルハ全ク之ヲ相反ス
 右ノ理ヲ解説センニハ水ヲ器皿ニ盛リ第百六
 十二圖ノ如ク之ヲ排氣鐘内ニ置キ内氣ヲ排
 出スヘシ然ルハ鐘内ノ氣壓減少スルヲ以テ
 其水沸騰スルヲ見ル又器皿ニ硫酸ヲ盛リ之ヲ

第百六十二圖



水器ノ側ニ置クハ其速ニ
 蒸氣ヲ吸収スルカ故ニ大ニ
 水ノ蒸發ヲ促進シ残余ノ水
 之カ為メニ甚シク熱ヲ奪ハ
 レテ遂ニ氷塊ヲ為スニ至ル
 又フランクリンノ沸水球ト
 稱スル器械ヲ以テ此理ヲ證
 スヘシ即チ第百六十三圖ノ如ク
 玻璃管ヲ凹字
 狀ニ屈曲シ兩端ニ空球ヲ附シ
 先ツ適宜ノ水ヲ
 大球ノ上頭ヨリ注入シ然ル後
 酒精燈ヲ以テ之

第百六十三圖

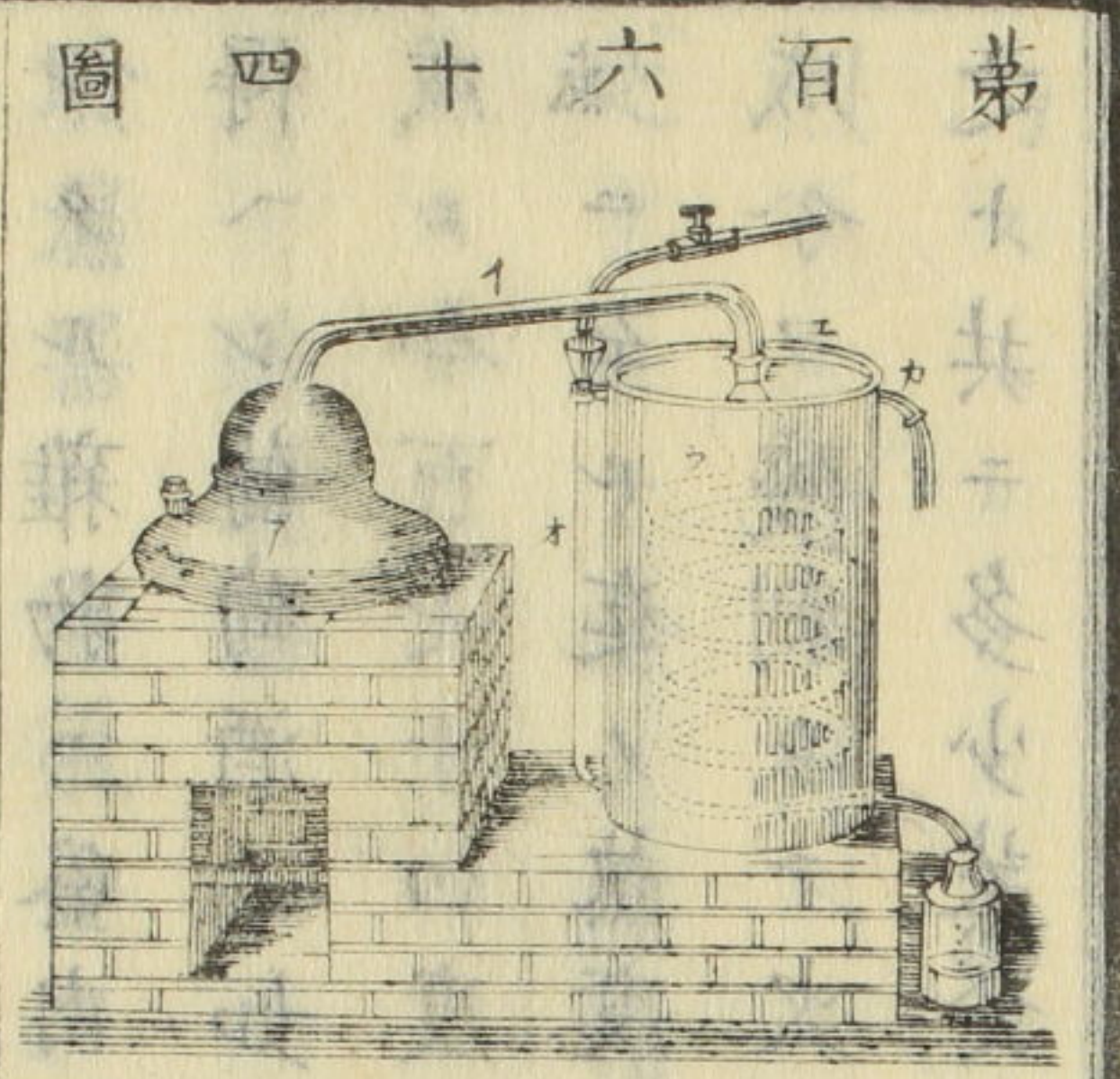


沸騰セシムルニ足ルノ第百六十三圖ノ如シ
其三 器皿ノ内面疎糙ナルキハ其粟起スル處
最モ氣泡ノ生成ニ便宜ナルヲ以テ滑澤ノ面ヨ

ヲ沸騰セシメ其蒸氣ノ管内ニ
充塞スルヲ度トシテ球頭ヲ密
閉スヘシ斯テ之ヲ放冷スレハ
則チ管内ノ蒸氣次第ニ減縮シ
テ水面ヲ壓搾スルノ極テ些少
ナルニ至ル故ニ手ヲ以テ小球
ヲ把握スルモ其熱尚能ク水ヲ

リモ沸騰ノ度低シ故ニ玻璃器ハ鐵器ヨリ液ヲ
沸騰セシムルニ高度ノ熱ノ要ス驗温器ノ沸騰
点ヲ定ムルニ當テ常ニ金屬器ヲ用井水ヲ沸騰
セシムルハ蓋シ之カ為メナリ
試ニ粗糙ナル鐵板ヲ灼熱シ板上ニ水ヲ點スレ
ハ爆然聲ヲ發シテ蒸散シ更ニ水痕ヲ殘スノナ
シ然レ氏若シ滑磨シタル鐵板ヲ以テ之ヲ試ム
レハ水點球狀ヲ為シテ徐ニ板面ヲ浮走シ敢テ
沸滓スルコナシ是其鐵中ヨリ射出スル熱ヲ為
ニ水點ノ下面早ク已ニ氣化蒸散シテ鐵面ニ觸

接スルヲナキニ由ル彼弄珠鈴者ノ水ヲ以テ
 手ヲ濕シ之ヲ金屬以溶解ニタル中ニ浸シテ傷
 害ヲ受ケサルモ亦此理ニ外ナラズ
 蒸餾 蒸餾ハ一旦液體ヲ蒸發シテ再ニ故ノ液體ニ
 復サシメ以テ他ノ混交物ヲ除去スルヲ謂ニシ
 テ其物ニ從ヒ蒸發ノ熱度ニ高低アルノ理ニ原
 キタル者ナリ此法ハ土世已ニ亞刺伯人ノ知リ
 第百六十四圖ハ現今所用器械及ヒ其用法ヲ



第百六十四圖
 示ス者ニシテ(ア)ハ蒸餾スル
 キ液ヲ盛ル所ノ釜(イ)ハ其蒸
 氣ヲ誘導スル管ナリ今蒸
 餾セント欲スル液ヲ釜中ニ
 盛リ下底ヨリ火熱ヲ施セハ
 其液漸次ニ蒸發シ(イ)管ヲ過
 キテ(ウ)ノ蛇管ニ至ル而シテ(ウ)管ハ(エ)ノ冷水器
 中ニ在ルカ故ニ蒸氣之カ為メニ収縮シテ液體
 行復シ遂ニ管ノ下端ヨリ滴落スルナリ蓋シ(エ)
 器ノ水ハ(ウ)管ノ蒸氣ニ感シテ徐々ニ熱ヲ生シ

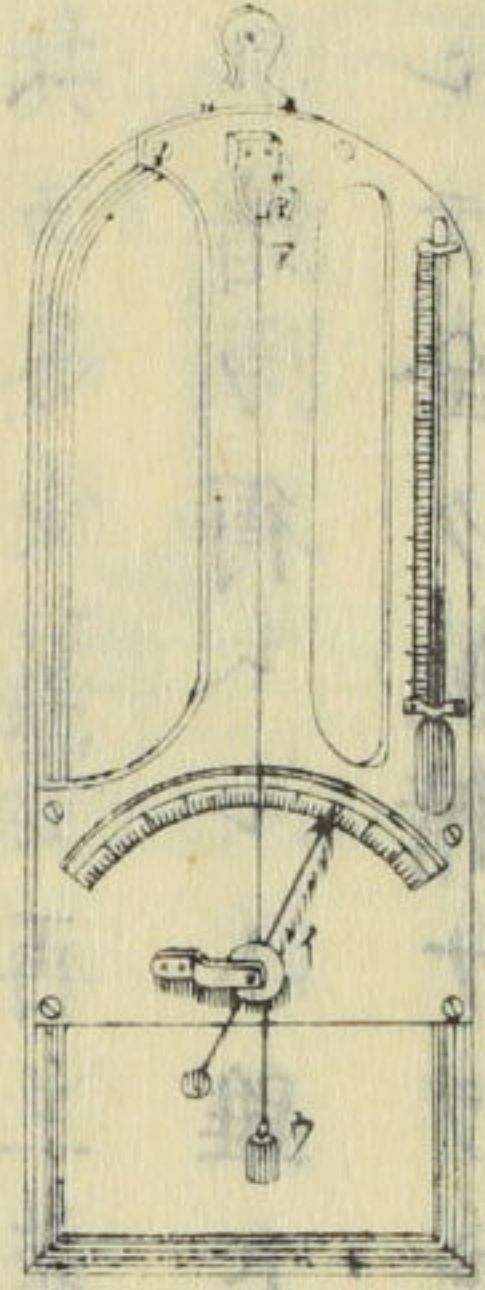
蒸氣ヲ収縮セシムルヲ能ハサルニ至ルヲ以テ
 預メ(オ)管ヨリ冷水ヲ注入シ別ニ(カ)管ヨリ温水
 ヲ瀉注シ其水ヲシテ終始温暖ナラシメサルヲ
 要ス此法ヲ用井テ水ヲ蒸餾スレハ其中ニ溶在
 シタル雜物ハ釜内ニ殘留シテ純乎タル清水ヲ
 得ヘシ葡萄酒ノ如キハ水火酒及ヒ染色質ヨリ
 成ル今百七十四度火酒ノ沸騰点ヨリ二百十二度水ノ沸騰点
 ニ至ル迄ノ熱度ヲ以テ之ヲ蒸餾スレハ他
 成分ヲ殘剩シテ火酒ノミヲ得ヘシ然レハ水分
 之ト共ニ多少蒸發スルカ故ニ純乎タル火酒ト

為スヘカラス蓋シ再三蒸餾スルキハ其性愈猛
 烈ナル者ヲ得ヘシト雖レ到底此法ノミニテハ
 之ヲシテ全ク純精ナラシムルヲ能ハサルモノ
 トス

驗濕器

驗濕器ハ空氣中ニ含有セル濕氣ノ多少ヲ驗量
 スル者ニシテ其製一ナラス人髮、鯨鬚、其他動物
 纖維等ノ如キ容易ニ濕氣ヲ吸収スル者ノ長短
 ヲ計リテ知ル者アリ或ハ海綿、木綿等ノ如キ濕
 氣ヲ吸収スル者ノ輕重ニ由テ驗スル者アリ或

ハ金屬板ノ如キ冷物ヲ空氣ニ觸接セシメ其面ニ露ヲ結フ多少ヲ見テ試ムル者アリ然レモ世人ノ多ク使用スル者ハ毛製驗濕器ナルカ故ニ今特ニ之ヲ論說スヘシ即チ第百六十五圖ノ如ク長サ七寸許ノ毛髮ヲ取り其一端ヲ(イ)ノ處ニ緊繫シ他端ヲ小滑車(イ)ノ軸ニ纏結シ又別ニ絹糸ヲ以テ反寸ノ方向ニ滑車ノ周圍ヲ絡ハシメ第百六十圖ノ如ク其下端ニ(ウ)ノ珧瑪ヲ懸垂シ毛髮ノ伸縮ニ從ヒ上下シテ滑車ヲ



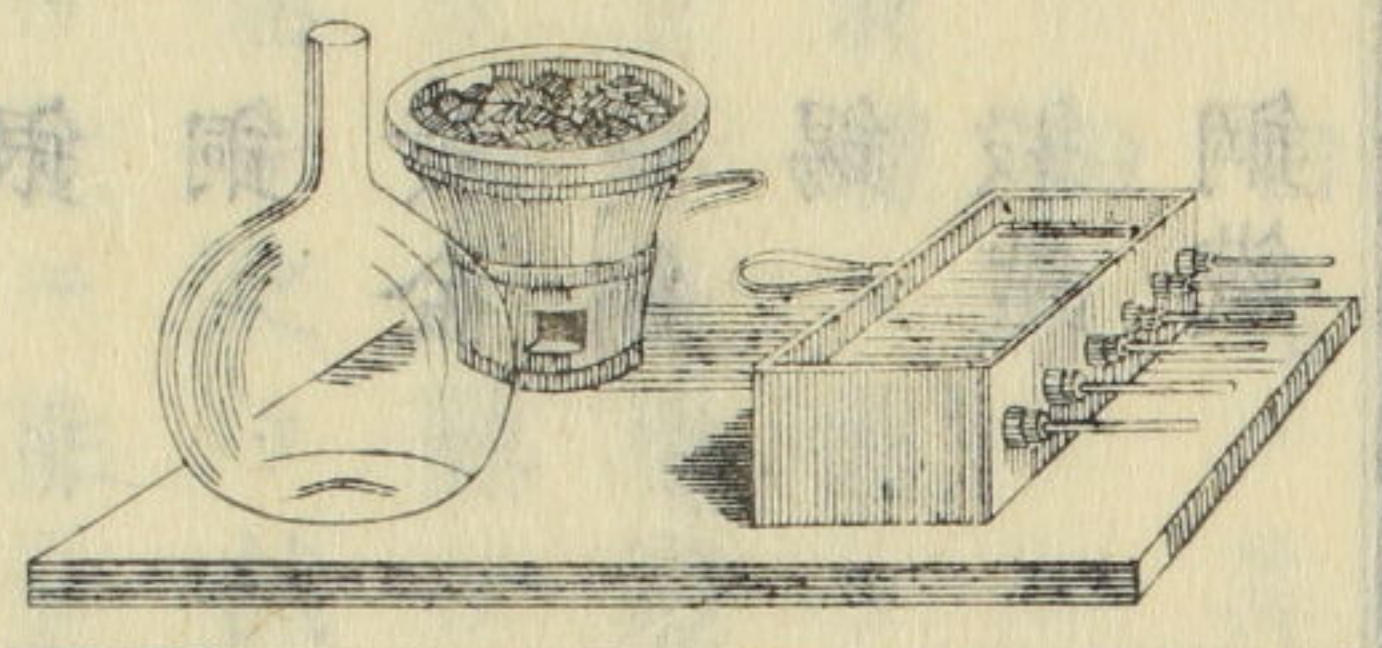
五圖

旋回セシメ同時ニ針ヲレテ其度目ヲ指示セシム蓋レ此器ニ劃度スルニハ之ヲ玻璃罩内ニ置キ其内ニ生石灰ノ如キ濕氣ヲ吸収スル者ヲ入レテ内氣ヲ乾燥セシメ其時計ノ指ス所ヲ以テ零度トシ然ル後濕氣ヲ以テ内氣ヲ飽和セシメ其時計ノ指ス所ヲ以テ百度トシ其中間ヲ百個ニ分劃スル者ナリ故ニ其針ノ指示スル所ノ度目ヲ見レハ則チ氣中ニ含有スル濕氣ノ多少ヲ知ルベシ而レテ之ヲ驗スル時ノ溫度ハ器側ニ附着セル驗濕器ヲ以テ知ルヘキナリ

熱ノ擴布

熱ノ擴布スルニ二様アリ一ハ物體分子ノ媒介ニ由リ一ハ「イ」セルノ媒介ニ由ル者ナリ前者ヲ熱ノ傳導ト云ヒ後者ヲ熱ノ射出ト云フ凡ソ物ハ其性質ニ從テ熱ヲ導クニ難易ハ異アリ其導傳レ易キ者ヲ良導體ト云ヒ其導傳レ難キ者ヲ不良導體ト云フ其知れぬ物ハ固形體ノ熱ヲ導クニ遲速ノ度アルヲ知ラント欲セハ第百六十六圖ノ如ク脩長匣ヲ製シ其側面ニ數個ノ短管ヲ列嵌レテ之ニ異質ノ棍ヲ樹

第百六十六圖



工軟蠟ヲ棍ニ塗リ然ル後匣中ニ沸湯ヲ盛リテ之ヲ試ムルニ各棍漸ク熱ヲ導傳スルニ從ヒ其蠟漸ク融解シテ或ハ棍端ニ至ル者アリ或ハ棍中央ニ止マル者アリ或ハ全ク融解セサル者アリ是ニ由テ其最モ導熱ニ易キ者ハ金屬ニシ

テ大理石、陶器、煉火石、木類、玻璃、樹脂等ト相次第スルヲ知ル此試法ハ和蘭國ノ化學家インゲンホウス氏ノ創驗セシ所ナリ

左ニ諸金属ノ導熱スル度ノ比較表ヲ掲ク但シ銀ハ万物中導力ノ最大ナル者タルニ由リ之ヲ以テ本位トス

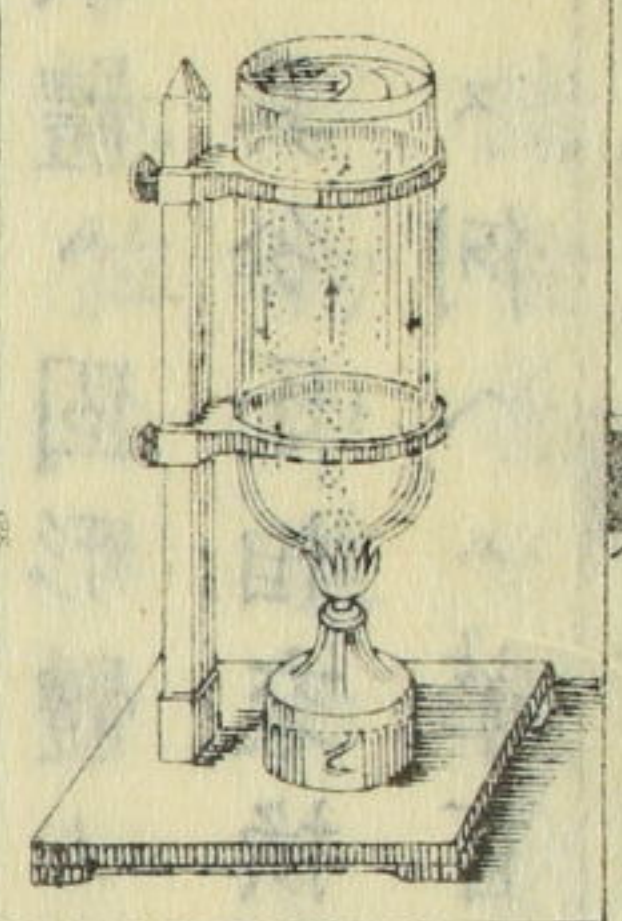
銀	銅	黃金	黃銅	錫	鍛鐵	鋼鐵
一零々	七五	五五	二四	一五	一零	一零

白金ハ其融風水ニ共ニ重噸九ノ中央ハ土
 融液體ニ在テハ金類ニ属セル水銀ヲ除クノ外
 總テ不良導體ナリ故ニラムホルド氏^出前ハ水ヲ
 以テ毫モ熱ヲ導傳セサル者ト為シタリ然レモ
 精密ニ之ヲ試ムルニ融液體ト雖モ悉皆導傳
 セサルニ非ス只其度極メテ少ナキヲ見ルノ以
 融液體ハ固形體ノ如ク良ク熱ヲ導傳セサルカ
 故ニ其分子相交換スルニ非レハ熱ヲ受クルト
 能ハス例ヘハ第百六十七圖ノ如ク水ヲ盛リ夕

第百

六十

七圖



ル器ノ下底ヨリ熱ヲ與フレ
 ハ器底ノ水分子ハ熱ヲ受ケ
 輕量ト成リテ浮上シ器頂ノ
 水分子ハ其量重キカ故ニ之ニ代リテ沈下ス此
 ノ如ク温ナル者ハ中央ヨリ昇リ冷ナル者ハ其
 四邊ヨリ降りテ常ニ二重ノ流動ヲ為シ全器ノ
 水盡ク同熱度ト成ルニ至テ止ム是ヲ目視セシ
 ト欲セハ擲木鋸屑ノ如キ其比重水ト相同シキ
 者ヲ水中ニ投シテ之ニ熱ヲ授與スヘシ此ノ如
 クスルキハ其鋸屑水ト共ニ運動シテ中央ハ上

昇シ四邊ハ下降スルヲ見ルヘシ
 浮氣體ハ其性熱ヲ導傳スルヲ甚ク難キ者ニシ
 テ其熱ヲ受クルノ状態ハ融液體ト異ナルヲナ
 シ然レモ其分子ノ動揺スルヲ至急ナルニ因テ
 其受熱ノ状態ヲ明カニシ難シ
 日常ノ物ニ就テ導熱ノ良不良ヲ驗知セント欲
 セハ須ク冷室中ニ在ル各種ノ物品ニ觸手シテ
 之ヲ試ムヘシ各物皆冷温異同アリテ金屬石類
 等ノ如キハ必ス冷カニ毛氈圍團等ノ如キハ必
 ス温カナルヲ覺フ蓋シ金屬等ハ良導體ニシテ

容易ニ人體ノ熱ヲ吸収スレモ毛氈等ハ不良導
體ニシテ體熱ヲ掠奪シ難キニ因ル彼ノ鍋等ニ
把柄ヲ設クルニ木ヲ以テシ熱物ヲ把ルニ布巾
ヲ用井ルハ熱ヲシテ手掌ニ傳達セサラシメン
カ為メナリ
盛夏氷ヲ貯蓄スルニ藁或ハ鋸屑等ノ如キ不導
體ヲ以テ圍繞スルハ外熱ノ傳導ヲ防ク為メニ
シテ隆冬草木ノ枯死ヲ護ルニ前法ヲ施スハ内
熱ヲ射出セサラシムルニ在リ又鳥翅獸皮ノ如
キハ不導體ナルノミナラス其間ニ多少ノ空氣

其含蓄スルヲ以テ寒威ノ侵入ヲ禦クニ適ス家
屋ノ障壁ヲ二重ニ作ル片嚴寒ノ堪ヘ易キモ亦
同理ナリ
既ニ論スル如ク熱ハ「イ」セルノ媒介ニ由テ此
物ヨリ彼物ニ傳通ス例ヘハ身ヲ爐邊ニ近クル
片温暖ヲ覺ユルカ如シ是ヲ物ノ射出熱ト云ヒ
其擴布スル線路ヲ熱線ト云ク蓋シ熱ヲ射出ス
ルハ特ニ太陽燭火炭火等ノ如ク灼熱セル體ノ
ミナラス兩間ノ万物一トシテ此性ヲ具セサル
ハナシ其熱度高キ者ハ射出ノ量多ク熱度低キ

者ハ其量少ナキヲ以テ異ナリトスルヲ之ニ
熱ノ射出ニ關係ヤル三個ノ法則アリ
第一則 熱ノ射出スルヤ上下左右ニ由テ異ナ
ルモノニ非ス例ヘハ熱物ヨリ前後左右同距離
ノ處ニ驗温器ヲ装置スルニ其昇降共ニ相均シ
キカ如シ
第二則 熱ノ射出スルヤ直線路ヲ為スモノナ
リ例ヘハ熱物ノ近傍ニ驗温器ヲ置クニ其度忽
チ上昇スレバ固形體ヲ以テ之ヲ遮隔スル片ハ
其度直ニ昇ラサルニ至ルカ如シ然レバ熱線若

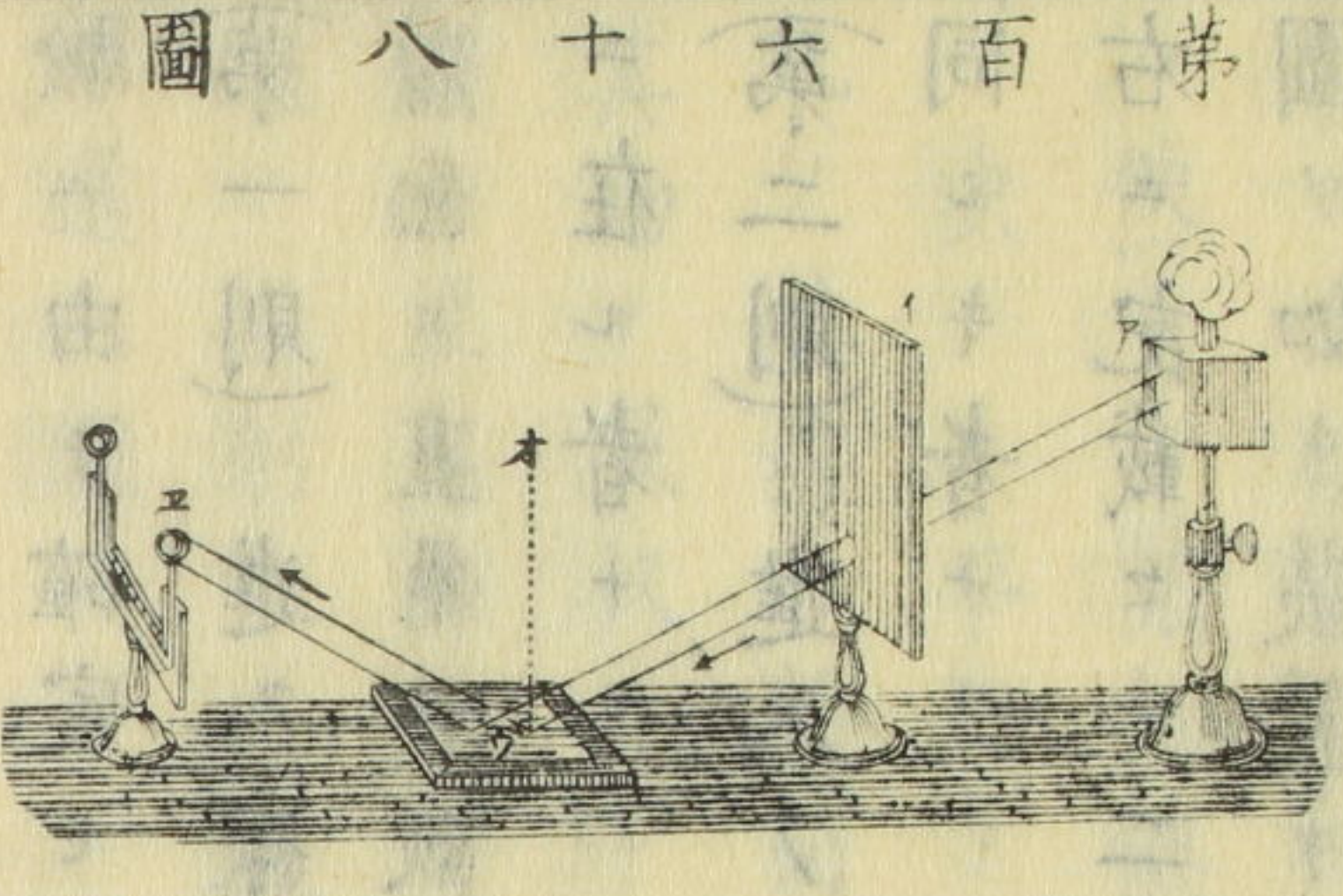
密體ヨリ疎體ニ進ミ或ハ疎體ヨリ密體ニ入
ル片ハ其經路ヲ變シテ屈折スル者ナリ之ヲ熱
線ノ屈折ト云フ而シテ之ニ關涉セル二個ノ法
則アレバ光線屈折ノ法則ト相同シキニ由テ之
ヲ光線ノ條ニ詳説ス宜シク參看スヘシ
第三則 射出熱ノ強弱ハ其體ノ熱度ノ高低ニ
正比例ヲ為シテ其體所在ノ距離ノ自乘ニ逆比
例ヲ為スモノナリ第一則ヲ試ムルニハ一面ニ
烟煤ヲ塗抹シタル錫匣ニ熱湯ヲ盛リ之ニ雙頭
驗温器ノ一球ヲ近ツケ木片ヲ以テ他ノ一球ヲ

遮蔽スヘシ但シ錫匣ノ強ク熱スルハ驗温器
 昇ルト最モ高ク錫匣漸ク冷ユルハ其度漸
 ク降ルヲ見ルヘシ又第二則ヲ試ムルニ前器ヲ
 使用スヘシ其法錫匣ノ熱度ハ常ニ同一ニシテ
 増減セサラシメ只驗温器ノ位置ノミヲ變セシ
 ムルニ在リ例ヘハ初メ在リシ處ヨリ二倍ノ地
 ニ移スキハ其熱度減シテ原度ノ四分一ト成ル
 四倍ノ地ニ置クハ十六分一ト成ルカ如シ
 以上論スル所ノ三則ハ真空中ニ於テ試ムルニ
 毫モ差異ヲ現ハサスト雖モ空氣中ニ在テ驗ス

レハ其射出熱ニ感應ヲ為スヲ以テ十分精密ナ
 ルニ至ラサルナリ
 凡ソ物體ハ始終熱ヲ射出シ又之ヲ受容スル者
 ニシテ前ノ法則ノ如ク熱ヲ含有スルト最モ多
 キモ其射出スルノ亦從テ多シトス故ニ諸
 體中熱度最モ高キ者ハ其射出スルノ量受容ス
 ルノ量ヨリ多ク熱度最モ低キ者ハ其射出スル
 ノ量受容スルノ量ヨリ少ナクシテ万物ノ熱度
 常ニ相平均セント欲スル者ナリ蓋シ諸體悉ク
 同一ノ熱度ナルハ諸物ノ射出スル熱量其受

容スル熱量ト相均クシテ熱度ノ變化ナカルヘ
シ然レモ諸物熱ヲ射出スルニ各多少アルニ由
テ決シテ平均ヲ得ルコトナシ
凡ソ熱線ノ物面ヲ射ルヤ令レテニト成リ一ハ
其物ノ吸収スル所ト成リ一ハ其返彈スル所ト
成ル其返彈スルヲ熱線ノ反射ト云フ而シテ熱
線ノ投射スル處ヲ進入点ト云ヒ其投射スル線
ヲ進入線ト云ヒ反彈スル線ヲ反射線ト云フ又
進入点ニ鉛直線ヲ畫シテ之ト進入線トノ間ニ
生スル角度ヲ進入ノ角度ト云ヒ反射線トノ間ニ

ニ生スル角度ヲ反射ノ角度ト云フナリ
熱線ノ反射ニ關涉セル二個ノ法則アリ是皆實
驗ニ由テ確定セシ者ニ係ル
第一則 進入線ト反射線トハ進入点ニ於テ其
體面ニ直角ニ設ケタル線ト常ニ同一ノ平面中
ニ在ル者ナリ
第二則 進入ノ角度ト反射ノ角度トハ常ニ相
同シキ者ナリ
右ニ記載セル二則ヲ驗證スルニハ第百六十八
圖ノ如キ装置ヲ以テス(ア)ハ黒煤ヲ塗抹セタル

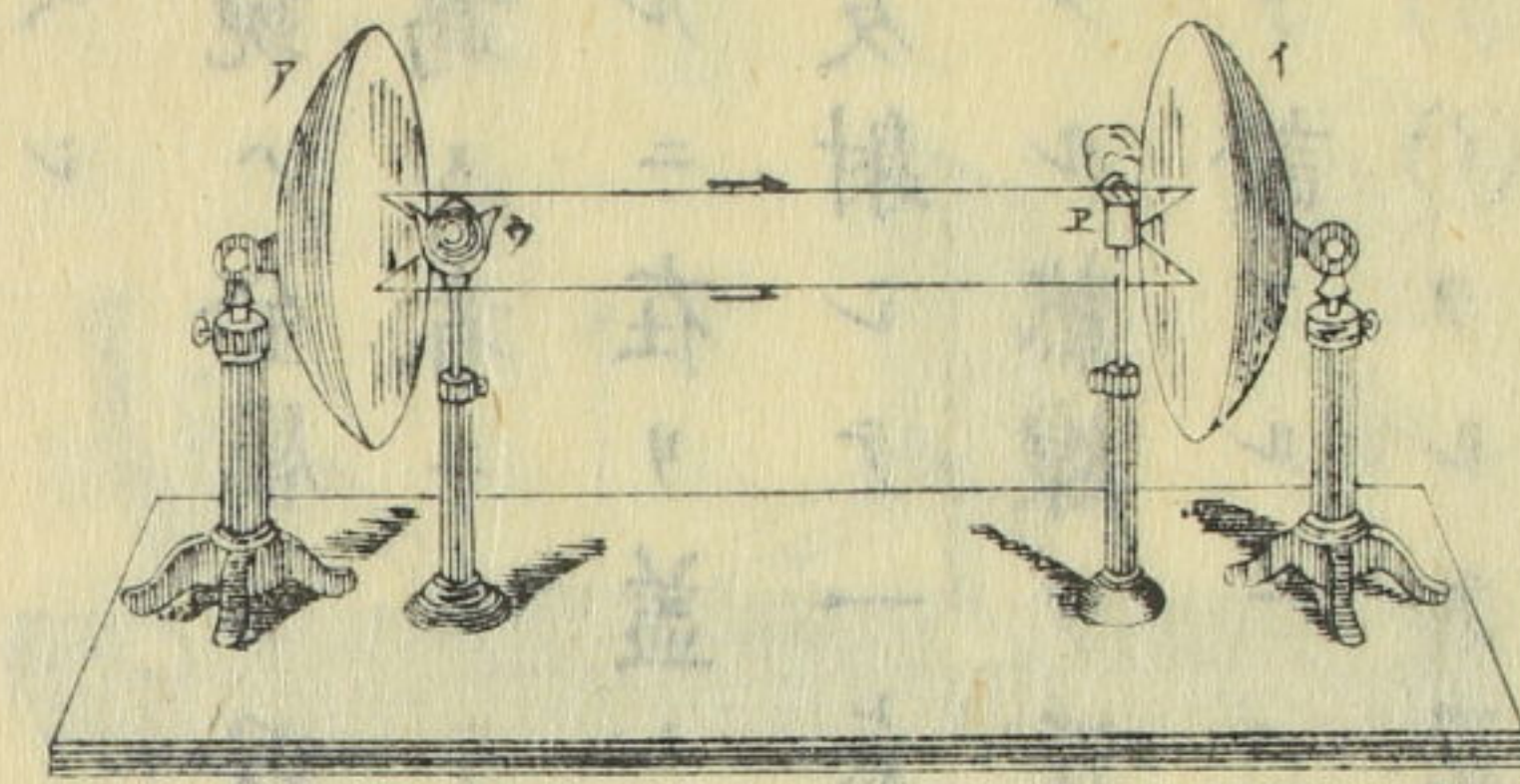


第六百六十八圖
 (エ) 球ヲ射ルカ故ニ其熱度ノ上昇スルヲ見ル因
 テ (ア) (ウ) ノ線ト (ウ) (エ) ノ線ト交反射物ニ直角ニ設

錫匣ニ熱湯ヲ盛リタル者 (イ) ハ
 (ア) 器ノ射出スル熱線ノ只一部
 ヲ通過セシムル為メ中心ニ小
 孔ヲ穿チタル木屏 (ウ) ハ反射物
 (エ) ハ雙頭驗温器ナリ是等ノ器
 械ヲ適宜ニ装置スルキハ (ア) ヲ
 リ射出スル所ノ熱線 (イ) ノ小孔
 ヲ通過シテ (ウ) ノ面ニ觸レ返テ

ケタル (ウ) (オ) ノ鉛直線ト同一ノ平面中ニ在リ且
 ツ (ア) (ウ) (オ) ノ角度ハ (オ) (ウ) (エ) ノ角度ト相均キヲ知
 ルヘシ
 凹鏡ハ金屬ヲ以テ製シ其面ノ凹陷恰モ酒盞狀
 ヲ為ス者ニシテ其用ハ熱線ヲ一点ニ湊合セシ
 ムルニ在リ蓋シ此鏡ハ鏡軸ニ平行シタル熱線
 ヲ反射シテ一点之ヲ燒点
ト名ツクニ湊メ又燒点ヨリ發
 シタル熱線ヲ反射シテ平行セシムルノ性アリ
 之ヲ證スルニハ第六十九圖ノ如ク二個ノ凹
 鏡 (ア) (イ) ヲ正シク相對セシメ (ア) ノ鏡点 (ウ) ニ

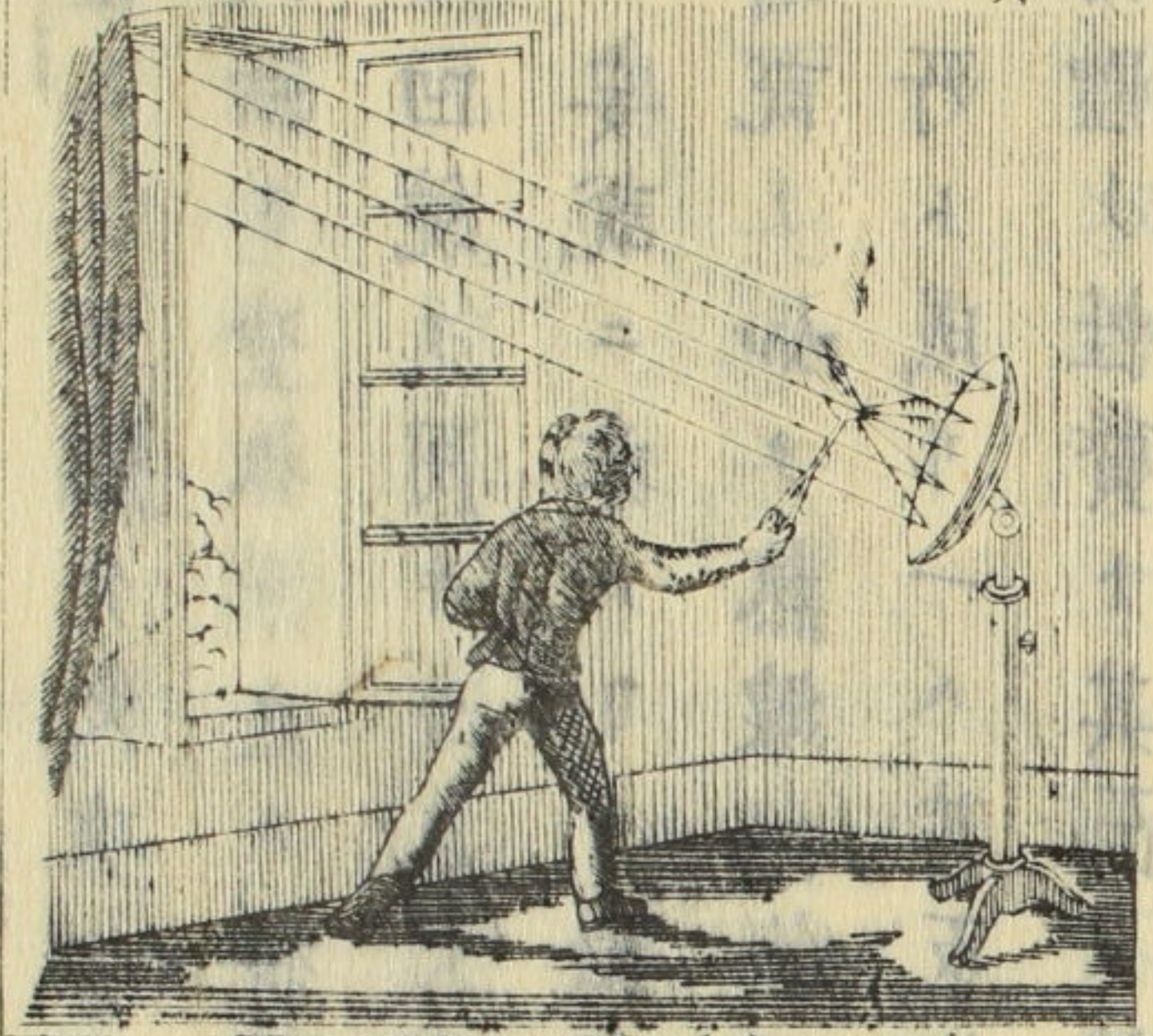
第百六十九圖



十尺許ナルモ其熱力能ク之ヲシテ燃燒セシムルニ勝テ然レモ若シ燐片ノ位置ヲ變換シ熱線

煨紅セル鐵丸ヲ置キ (イ)ノ燒点 (エ)ニ燐片ノ如キ燃燒シ易キ者ヲ居クヘシ此ノ如クスルキハ鐵丸ヨリ射出スル熱線 (ア)鏡ノ面ヲ射リ鏡軸ニ平行シテ反射シ再ヒ (イ)鏡ノ面ニ觸レ更ニ反射シテ遂ニ (エ)ノ燒点ニ湊合スルヲ以テ兩鏡ノ間相距ル一二

第百七十七圖



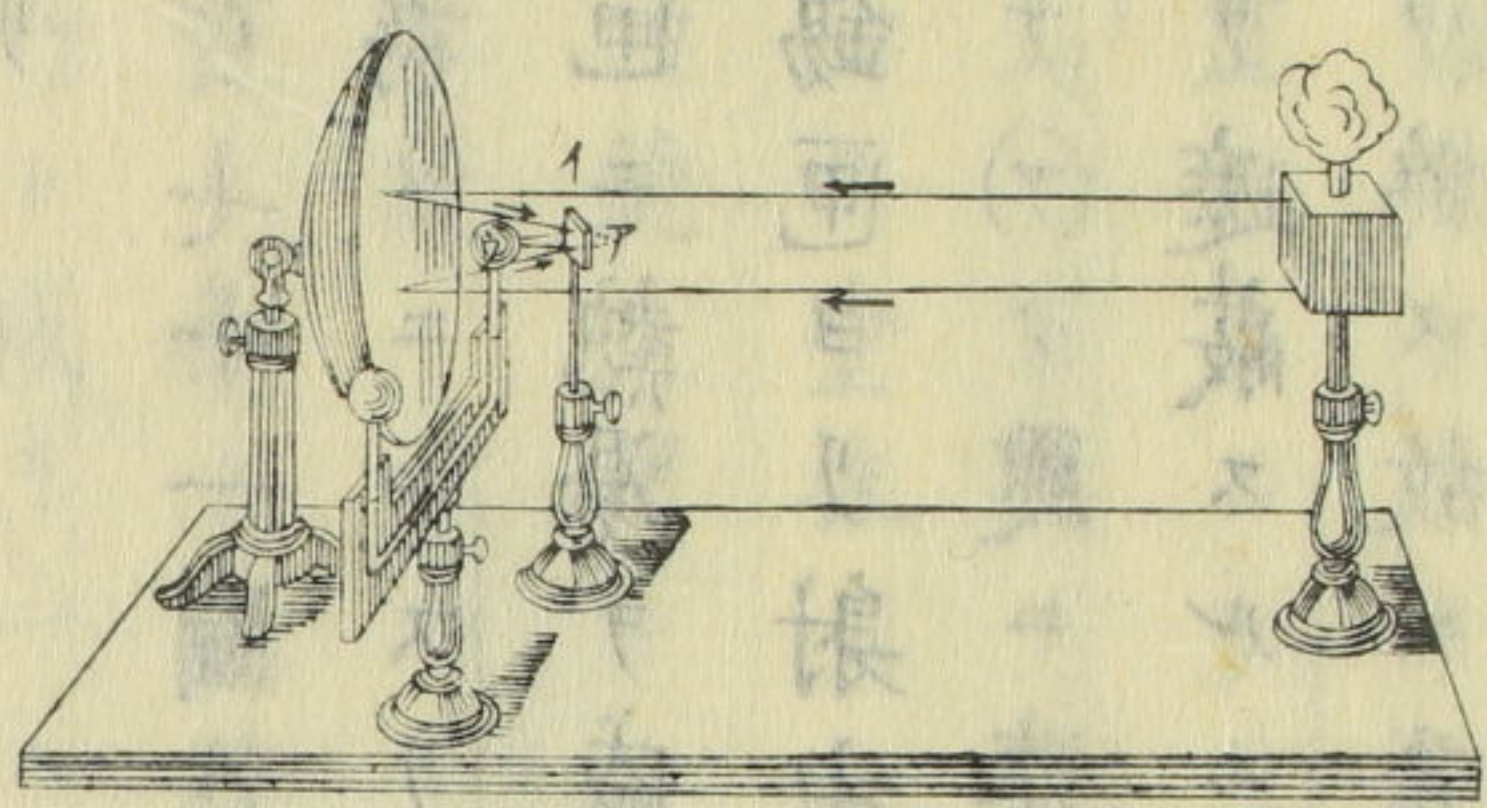
ヲシテ其上ニ湊合セサラシムレハ決シテ之ヲ燃燒セシムルヲ能ハサルモノトス又此鏡ヲ用井テ

太陽ノ熱線ヲ湊合スルヲ得ヘシ第百七十圖ハ即チ其用法ヲ示ス者ニシテ鏡軸ヲ太陽ノ光線ニ平行セシムルハ其線鏡面ニ觸レ反射シテ燒点ニ湊合スルカ故ニ燃燒シ易キ物體ニ点火スヘキ熱力ヲ生スルニ至ル傳ヘ聞

ク古昔アルキミダス氏出前此種類ノ凹鏡ヲ多ク
 装置シテシラキトス港西々里島ニ碇泊シタル中ニ在リ
 羅馬ノ軍艦ヲ火攻セシトアリト後世バフホ
 氏油ヲ塗抹シタル板ヲ二百二十尺餘ノ處ニ置
 キ凹鏡ヲ用井テ点火シ得タルニ由リ始テ傳聞
 ノ妄説ニ非ルヲ徴シタリ百六十圖ハ明
 前説ノ如ク熱線ノ物ニ觸ルヤ一ハ其吸收ス
 ル所ト成リ一ハ其反射スル所ト成ル其比例ハ
 物體ノ性質ト其面ノ瑩滑ト否トニ由テ異ナル
 也ノニテ反射力ノ強キ者ヲ良反射體ト云ヒ其

弱キ者ヲ不良反射體ト云フ要スルニ良反射體
 ハ吸収力少クシテ不良反射體ハ吸収力多キ者
 ナリ
 第百七十一圖ハ物體ノ反射力ノ強弱ヲ試験ス
 ル為メニレスリイ氏ノ使用シタル装置ニシテ
 錫匣ニ熱湯ヲ盛リ之ヲ凹鏡ト正對セシムル片
 ハ錫匣ヨリ射出スル所ノ熱線凹鏡ニ觸レ反射
 シテ(ア)ノ處ニ湊合セントス然ルニ(イ)板ヲ以テ
 之ヲ遮蔽スルニ由リ再ヒ反射シテ遂ニ(ウ)燒
 点ヲ為ス故ニ其燒点ニ雙頭驗温器ハ球ヲ置

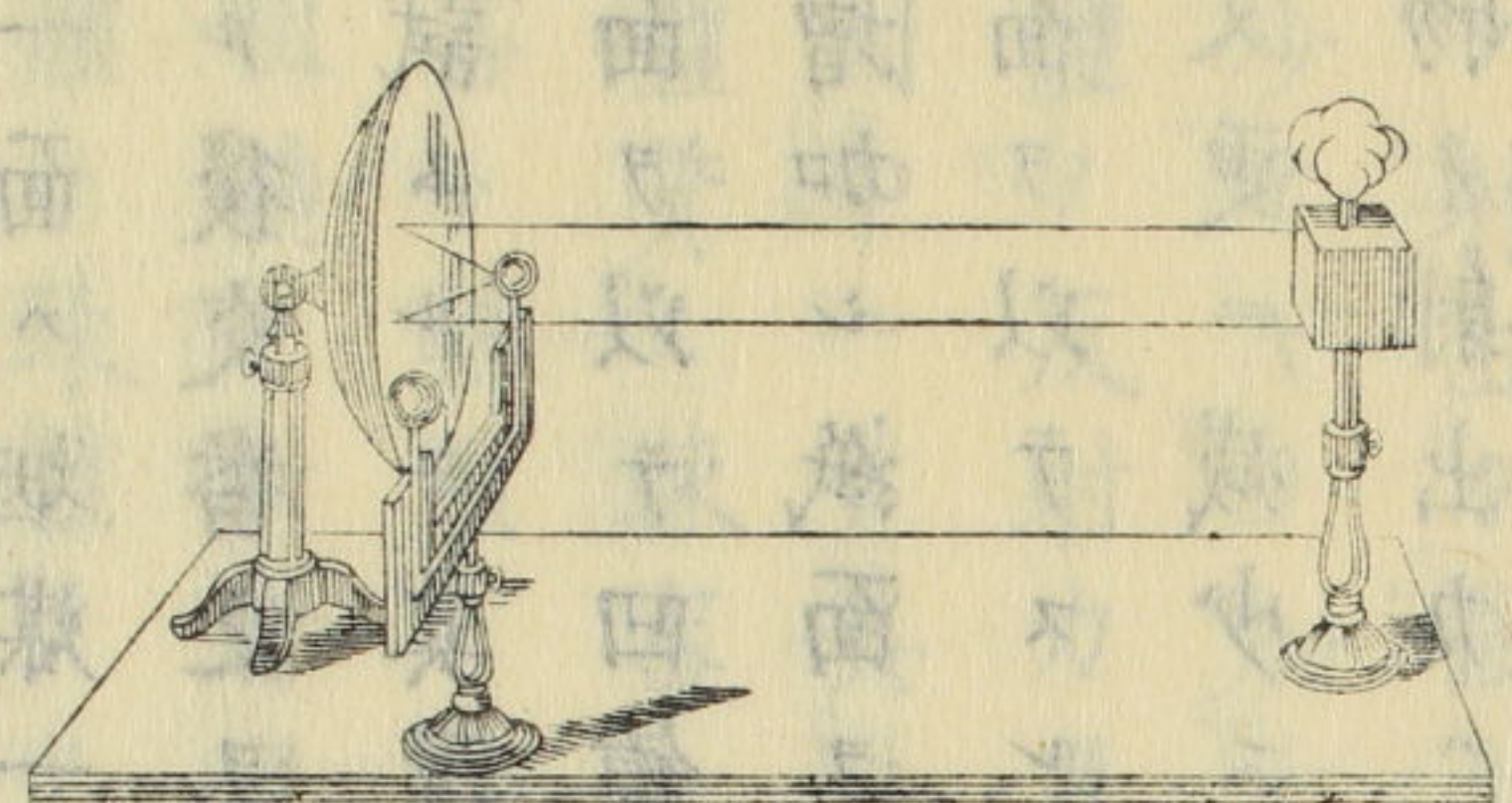
第百七十一圖



物體ノ吸収力ヲ試験スルニレズリイ氏復前器ヲ用井タリ其法錫匣ト凹鏡トハ前ノ如ク装置

キ(イ)板ヲ交換シテ其熱度ノ昇降ヲ見レハ則チ反射力ノ強弱ヲ比較スルヲ得ヘシ此法ニ因テ試験シタルニ黄銅ハ反射力最モ強ク銀ハ其十分ノ九錫ハ十分ノ八玻璃ハ十分ノ一ニシテ烟煤ヲ塗リタル板ハ更ニ之ヲ反射セサルヲ知レリ

第百七十二圖



射カ弱キ者ハ吸収力強キヲ知レリ其一面ノ射出カノ強弱ヲ試験スルニレズリイ氏復前器

シテ第百七十二圖ノ如ク其燒点ニ驗温器ノ一球ヲ置キ試験セント欲スル諸物ヲ以テ球ヲ塗被シタルニ烟煤ヲ塗リタル片ハ其熱度大ニ増加シタルニ黄銅ヲ以テ被ヒタル片ハ其僅ニ増加スルヲ見タル之ニ由テ反射力強キ者ハ吸収力弱ク反

ヲ用井タリ其法試験セント欲スル諸物ヲ以テ
錫匣ノ外面ヲ被覆スルニ在リ例ヘハ其一面ハ
錫一面ハ烟煤一面ハ紙一面ハ玻璃ヲ以テ被ヒ
然ル後交番之ヲ凹鏡ニ對セシメ又驗温器ノ昇降
ヲ試ムルニ其度各同シカラズ烟煤ヲ塗抹シタ
ル面ヲ以テ凹鏡ニ對セシメタル其熱度大
ニ増加シ紙面ヲ以テスル其熱度減少シ玻
璃面ヲ以テスレハ更ニ減少シ錫面ヲ以テスレ
ハ又更ニ減少スルヲ見タリ是ニ由テ之ヲ見ル
ニ物ノ射出カハ吸収カト其カヲ同フスル者ニ

シテ射出カ強キ者ハ則チ吸收カ多クシテ反射
カ少ナキヲ知ルナリ又凹鏡ニ對セシメタル其
物體ノ反射力及ヒ吸収カニ變化ヲ起サシムル
原因中ニテ其主眼ナルモノハ物面ノ瑩滑ト否
ト體質ノ疎密ト進入熱線ノ方向ト物色ノ光明
ト否ト熱原ノ性質ノ類是ナリ蓋シ瑩滑ナル者
ハ粗糙ナル者ヨリ反射カ強クシテ吸收カ弱ク
密體ハ疎體ヨリ反射カ強クシテ吸收カ弱ク進
入線ノ直射ハ斜射ヨリ吸收スルト多クシテ反
射スルト少ナク暗黒ナル者ハ光明ナル者ヨリ

吸收スルコト多クシテ反射スルコト少ナシトス而
 シテ熱原ノ性質ハ常ニ反射力ト吸收力トヲ變
 化セシムル者ニ非ス例ハ一物アリ之ニ塗漆
 スルニ白鉛ヲ以テスルハ燈火ノ熱ヲ吸收ス
 ルコト少ナクシテ錫匣ノ發射スル熱ヲ吸收スル
 コト多ク又塗ルニ烟煤ヲ以テスルハ熱原ノ異
 同ニ關セス其吸收スル所ノ熱量ハ常ニ相同シ
 キカ如シ
 今平常ノ事ニ就テ之ヲ例セシニ衣服ノ如キ夏
 日ハ炎熱ヲ侵入セサラシメ冬日ハ體熱ヲ射出

セサラシメテ體温ヲ平均セシムル者ナリ羅紗
 或ハ毛皮ノ如キハ其質疎糙ニシテ射出力弱キ
 カ故ニ冬日ノ沍寒ヲ防クニ適シ麻布或ハ綿布
 ノ如キハ其質緻密ニシテ反射力強キカ故ニ夏
 日ノ炎熱ヲ避クルニ宜シ又色料ヲ以テ之ヲ論
 スレハ白色ハ黑色ヨリ熱ヲ射出スルコト少ナク
 反射スルコト多キカ故ニ冬夏共ニ適切セサルハ
 ナシ又極地ニ棲息スル鳥獸ノ如キ其色多クハ
 白色ニシテ殊ニ冬日ニ至レハ益白キヲ加フ是
 レ其人畜栖息シ能ハサルカ如キ沍寒ノ地ト雖

凡尚此妙手段ヲ設テ以テ畜類ヲ生存セシムル
造物主ノ惠澤ト謂ハサル可シヤ又魚油及ヒ獸
脂ハ其性熱ヲ射出スルノ力弱クシテ反射スル
ノ力強シ故ニラブラント人及ヒイスキモ山人
種ノ如キハ之ヲ全身ニ塗抹シテ體熱ノ散出ヲ
護シ熱帶地方ノ黑人種ノ如キハ之ヲ身體ニ塗
リテ外熱ノ侵入ヲ防クト云フ
雪及ヒ氷ハ熱ヲ反射スルヲ強クシテ吸収射出
共ニ弱キモノトス故ニ太陽ノ熱線ヲ受クルモ
其融解スルヲ甚ク遅シ然レ凡石或ハ木片ノ其

面ニ突出スルヲアルキハ其物早ク己ニ太陽ノ
熱ヲ吸収シ之ヲ四邊ニ射出シテ以テ近傍ニ在
ル氷雪ヲ融解セシム彼雪裏ニ埋没セル草木ノ
枯死セスシテ凍沍ニ堪ルハ全ク雪ノ熱ヲ射出
シ又之ヲ導傳スルノ力弱キカ為人ニ地温ヲ散
去セサラシムルニ因ルナリ
既ニ論スル如ク暗黒粗糙ナル者ハ吸收力多ク
瑩滑緻密ナル者ハ射出力少ナシ故ニ物ヲ沸煮
スルニハ粗糙ニシテ暗黒ナル器ヲ善トスレ凡
其放冷セサルヲ欲セハ緻密ニシテ瑩滑ナル器

ヲ用井ルヲ要ス蓋シ銀器ノ陶器ヨリ善ク温ヲ
保有スルハ是カ為メナリ然レモ銀ノ性タル導
體ナルニ由リ木或ハ骨等ヲ以テ是カ把柄ヲ作
ラサルヲ得ス又洋火爐ノ如キハ元來熱ヲ放射
スルノ具ナルニ由リ其質粗糙ニシテ且ツ暗黒
ナル者ヲ用井ルヲ善トス而シテ之ヲ設クル屋
室ハ善ク其熱ヲ反射スルヲ要スルカ故ニ白色
緻密ニシテ且ツ滑澤ナル者ヲ以テ其障壁ヲ作
ルヲ可トス

比熱

爰ニ數種ノ物體アリ之ヲシテ同一ノ熱度ナラ
シメントスルニ其費ユル所ノ熱量ハ物ニ從テ
多少ノ異ナルアリ其熱量ノ多少ヲ比較スル所
ノ數ヲ名ケテ比熱ト云フ例ヘハ同量ノ水鐵及
ヒ水銀ヲ取り之ニ同量ノ熱ヲ與フルトキハ其
熱度最モ高キニ至ル者水銀ニシテ次ハ鐵次ハ
水ナリ而シテ此三物ヲ同熱度ニ至ラシメント
欲スルニ水ニ與フル熱量ヲ一位トスレハ鐵ハ
其十分一水銀ハ其三十分一ニシテ足ル故ニ
水ノ比熱ハ鐵ニ十倍シ水銀ニ三十三倍スルヲ

ヲ知ルヘシ但レ物體ノ比熱ヲ較セント欲セハ
先ツ其一位ヲ定メサル可ラス乃チ一斤ノ水ヲ
華氏ノ度ニテ一度増熱セシムル為ニ費ユル所
ノ熱量ヲ以テ一位ト為スナリ
物體ノ比熱ヲ檢測スルノ法二種アリ
其一試驗セント欲スル物體ヲ一定度例ハ華
氏ノ二百十二度ニ熱シテ之ヲ氷塊ニ觸接セシ
ムルニ在リ此ノ如クシテ熱物ノ二百十二度ヨ
リ三十二度ニ至ルマテ放冷スル際ニ融解シタ
ル氷ノ多少ヲ計リテ熱物ノ放出シタル熱量ヲ

知レハ從テ其比熱ヲ決定スルヲ得ヘシ何トナ
レハ既ニ論スル如ク一斤ノ氷ヲ融解セシムル
ニハ百四十二位ノ熱ヲ要スルヲ知レハナリ
其二試驗セント欲スル物體ヲ若干度ニ熱シテ
之ヲ冷水中ニ投入スルニ在リ然ルハ二物其
熱ヲ交換シテ相平均スルニ至ル此時ニ當テ二
物ノ重量ト其原熱ト其平均熱トヲ知レハ其比
熱ヲ測ルヲ得ヘシ例ハ六十斤ノ鐵ヲ百五十
一度ニ熱シ七十度ノ水百八十斤ノ内ニ投入ス
ルニ二物ノ熱度七十三度ニ至テ平均スルトス

然ルキハ左式ノ如クシテ鐵ノ比熱ヲ知ルヘキ
ナリ
180(73-70) = 9
60(57-73) = 78
鐵ノ比熱 = 0.153

茲ニ最要物二三種ノ比熱表ヲ掲ケル
水 一、零々々
其鐵 零、一一五
銅 百零、々九、五
水銀 零、々三、三
白金 零、々三、二
此比熱表ヲ掲クルハ水、鐵及ヒ銅ノ同量ヲ取リ

之ヲ熱シテ同度ニ至ラシメントスルニ其際水
ノ吸収スル熱量ヲ一千位トスレハ鐵ハ百十五
位銅ハ九十五位ノ熱量ニテ足ルヲ示ス為メ
ナリ而シテ水ハ比熱最モ多キカ故ニ之ヲシテ
其熱度ニ熱セントスルニハ他物ヨリ更ニ多量
ノ熱ヲ要スル者ナリ
浮氣體ノ比熱ヲ測定スルニハ空氣ヲ以テ標準
トス但シ之ヲ測定スルノ方法ハ固ヨリ固、液二
體ト異ナリト雖モ其原理ハ全ク相同シキヲ以
テ今茲ニ詳説セス

熱ノ根元及ヒ寒ノ根元

發熱ノ原因五アリ曰ク太陽熱曰ク電氣熱曰ク化學抱合熱曰ク壓迫及ヒ鎚擊熱曰ク摩擦熱是ナリ
一 太陽ハ熱ヲ波及スル最大無比ノ根元ナリ然レ其熱ヲ發生スル原因ニ至テハ何ニ由來スルヤヲ知ル能ハス試ニ我地球ニ受クル一歳ノ熱量ヲ測算スルニ厚サ百尺アリテ地球ヲ包裹スヘキ堅氷ヲ融解シ盡スニ足ルト云フ斯ク至大ノ量ト雖レ太陽ノ地球ヲ距ルヲ極テ遠キカ

故ニ地球ハ纔ニ太陽ノ射出スル全熱ノ少量ヲ受クルニ過キサリナリ
二 電氣ニ由テ發生スル所ノ熱ハ電氣ノ條下ニ論説スルヲ以テ今茲ニ贅セス
三 凡ソ物ハ化學抱合ヲ為スニ當テ必ス熱ヲ發生スルモノトス蓋シ抱合遲緩ナル片ハ其熱從テ弱ク抱合迅疾ナル片ハ其熱從テ強キノミナラス或ハ光輝ヲ放射スルニ至ルト金箔ヲ以テ塩素氣中ニ投入スル時ノ如ク
燃燒モ亦化學上ノ抱合ニ外ナラス例ヘハ薪ヲ

燒クカ如キ其中ニ現存セル炭水ノ二素ト大氣
中ノ酸素ト抱合シテ新ニ炭酸氣及ヒ水蒸氣等
ヲ生スルナリ
四凡ソ物ヲ壓迫シテ其容積ヲ減縮セシムルキ
ハ必ス熱ヲ發生スル者ニシテ其壓迫愈大ナレ
ハ發スル所ノ熱量モ亦愈多シ故ニ浮氣體ヲ壓
迫スルヲ劇シケレハ則チ其熱力能ク可燃體ニ
点火スルニ至ル但レ壓搾性ノ條下ニ記載シタ
ル裝置ヲ用井テ圓筒ノ下底ニ引火絮ヲ置キ活
塞ヲ速カニ推進スレハ火絮直ニ熱ヲ發シテ燃

燒スルヲ見ルヘシ又鐵片ノ如キ之ヲ鈍擊スレ
ハ直ニ熱ヲ發ス鋼鐵ヲ以テ火石ヲ打撃スル時
ノ如シ
五二物相摩擦スルキハ大ニ熱ヲ發起スル者ニ
シテ甚シキニ至テハ其物ヲ燃燒セシムルヲア
リ例ヘハ氷ノ如キ二片相摩擦スルキハ溶解ス
ヘキ熱力ヲ生シ又強大ノ器械ノ如キ其輪軸ニ
塗膏スルヲ急シハ彼是相摩擦シテ火ヲ發ス
ルヲアリ未開ノ變夷ハ此法ニ因リ木片ヲ摩擦
シテ火ヲ得ルト云フ

寒冷ノ由來スル根元四アリ曰ク物ノ融解曰ク物ノ蒸發曰ク瓦斯ノ膨脹曰ク熱ノ射出是ナリ就中(一)物ノ融解ニ由テ寒冷ノ生スルハ其融解スルニ際シテ顯熱ヲ吸収スルニ由ル(二)物ノ蒸發スルハ於ケルモ亦然リ蓋シ此二者ハ己ニ解明セルヲ以テ復タ茲ニ詳説セス(三)前説ノ如ク浮氣體ヲ壓迫スレハ多量ノ熱ヲ發生スレハ其膨脹スルハ必ス自己ノ熱ヲ吸収スル者ニシテ膨脹愈甚シケレハ其熱ヲ吸収スルハ愈多ク寒冷ヲ生スルハ亦愈大ナル者ナリ

リ試ニ空氣ヲ濃氣筒ニ聚積シ然ル後速カニ其塞蓋ヲ開ケハ筒口ニ一團ノ白霧ヲ生スルヲ見ル蓋シ筒中ヨリ逃散スル所ノ空氣頓ニ膨脹セシト欲シテ自己ノ顯熱ヲ吸収シ熱度之カ為メニ低下スルカ故ニ其中ニ含有セル水分ヲシテ凝集セシムルニ因ルナリ(四)地球及ヒ其表面上ノ諸物ハ終始熱ヲ射出スル者トス然レハ日中ニ在テハ太陽ヨリ受ケル所ノ熱量特ニ其失ヲ償フニ足ルノミナラス其得ル所常ニ多キニ居ル而シテ夜間ニ至テハ全

ク之ト相反シテ其得ル所失フ所ヨリ少ナシ故
ニ地面寒冷シテ遂ニ霜露ヲ結フニ至ル又明月
ノ夜ハ朧月ノ夜ヨリ霜露ヲ生スルコト多キニ因
リ世俗動モスレハ霜露ハ月光ノ所為ナリト思
想スヘケレモ是全ク然ルニ非サルナリ蓋シ明
月ノ夜ハ雲霧ノ遮蔽ナキニ因リ地面ノ熱ヲ射
出スルコト速カナルヲ以テ大ニ寒冷ヲ生スレモ
朧月ノ夜ハ之ニ反シテ雲霧四塞シ其地面ニ向
テ射出スル所ノ熱量殆ト地面ヨリ發散スル熱
量ト相平均シテ結局霜露ヲ結ハシムル如キ寒

冷ヲ生スルニ至ラサルナリ又植物ハ其性熱ヲ
射出スルコト速カナルヲ以テ霜害ヲ蒙ルコト殊ニ
甚シトス故ニ之ヲシテ枯死セサラシメント欲
セハ預メ藁或ハ筵席等ヲ以テ之ヲ蔽ヒ熱ノ發
散ヲ防禦セサルヘカラス

